
ネームレス

T・F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネイムレス

【Nコード】

N3165Z

【作者名】

T・F

【あらすじ】

記憶を求める少年の物語。

彼を支えるのは常識だけ。

しかしそれさえも、彼の目の前に訪れた現実は奪い去っていく。

荒唐無稽で途方途轍もない世界の裏側に身を投じた少年は、記憶と世界の未来を巡って走り出す。

「プロローグ」(前書き)

T・Fと申します。

当サイトへの投稿は初となります。

一生懸命書きました。

せっかく無料ですので、思う存分お読み頂ければ幸いです。
ます。

忌憚のないご意見ご感想をお待ちしております。

「プロローグ」

二〇一二年 某日。

通常、軍事基地に置かれるレーダーには、電磁波が用いられる。

レーダーから発された電磁波が対象物にぶつかり、跳ね返ってきた反射波を計測することにより、対象物との相対距離や正確な位置・方向を算出するのである。

しかし昨今、そういった通常のレーダー・システムでは感知されにくい兵器が、先進国を中心に次々と開発されるようになった。

ステルス
隠密性を備えた兵器だ。

それは主に戦闘機や戦艦に施される装備で、レーダー波を大きく屈折させて反射波を正方向へ返さないようにしたり、機体の装甲にレーダー波を吸収させる性質を備えた素材を用いたりするのである。ただ、レーダーも馬鹿ではないので、いくらステルス兵装されていても、距離が縮めば縮むほど発見しやすくなる。また目視されれば、ステルスはナンセンスな道具に成り下がる。

最近ではレーダーを送信機と受信機に分けて設置し、曲げられたレーダー波をキャッチするような高度な物なども考案・開発・応用され、進歩が続けている。

しかし、太平洋を越えて浦賀水道に差しかかったとある未確認飛行物体は、現代技術の粋を極めても太刀打ちできないほどの、完全と呼ぶに相応しい隠密性を獲得していた。

透過して目視できず、レーダー波を吸収し、かつゆるく屈折・歪曲させるので感知されず、自身の熱量を外気と同調させて熱量測定器や暗視装置による発見を回避している。サーモグラフィ ナイトビジョン

さらにその未確認飛行物体は、ほぼ無音で悠々と飛行していたのだった。

まさにUFOにも匹敵すると思われる、恐るべき性能を有した飛

行物体だ。

日本の海自及び米軍の、二つの横須賀基地の眼前を難なくクリアしたそれは、東京湾上空を突き進み、深夜の都心へと向かっていた。

＊ ＊ ＊

「っていうかぁー、今回の作戦^{コレ}、完全に拉致ですよねー」

未確認飛行物体：もとい、ある組織の所有するハイテク輸送機へDEM-3-2の中で、女が仰向けに寝転がりながら訊いた。彼女は機内右側の縦座席^{ロングシート}を全て占拠して、他三名の乗組員を向かいの席に追いやっている。

今年で二十一歳になる女のだらしない格好と物言いに、丸坊主の巨漢は溜め息をついた。

「何度も言わせるな、エリ。あくまで保護だ、保護……」

エリというポニーテールのよく似合う美女は、それでも食ってかかるように言った。

「いやいや、コレ絶対拉致ですよ。だって寝込み襲うんでしょ？
しかも対象ってまだ十七歳の子供——」

「言うな。気が重いのはお前だけではない。しかし、上からの命令だ。従うほかあるまい」

「命令って……。またあのバグって人からのタレコミですよ。信用できるんですか？」

「できると上が判断したんだろう。お前の勘繰りも分からんでもないが、だからこそ我々が差し向けられている。いかなる状況にも対応できる、我々がな」

「へっ。敵の偽情報^{フラップ}の可能性が消えねえんじゃ、体のいい当て馬扱

いじゃねえかよ。いくら俺達でも、こんな人口密集地でドンパチだなんて面倒は御免だぜ」

エリではなく、若い男が口を挟んできた。

銀髪のウルフカットの下で、鋭い三白眼を光らせている。彼は巨漢に続けて言った。

「まあ、それ抜きにしてもだ……。もしも対象がノーマルだったら、責任取れんだろうな？」

「それは……。その時だ」

苦い顔をする巨漢に、銀髪男は立ち上がって声を荒げた。

「一人の人生懸かってんだぞ、こんなことで犠牲者出してたら組織の名折れだろが……！」

「……名無しの我々に折れるものがあるか。少し頭を冷やせ、ケン」

銀髪男――ケンは、舌打ちして機内の壁を蹴った。

その様子^{しやうす}にエリは、「ワンちゃん怒られてやんの。カッコわるう」

「ちっ……！ 黙れよ、プレデター女」

「ああん！？ 今なんつった！」

「やめんかっ……！！」

巨漢の雷声が、わずかに機体を揺らした。

「貴様らはどうしてこう、いつもいつも……！！！」

『酒顛隊長さん、アンタの声はデカすぎる。気を付けてくれないと墜ちちまうぞ』

「ぬっ…！」

この輸送機を操縦する機長からの、機内アナウンスだった。エリがそれを聞いてほくそ笑んでいる。

そんな彼女の性悪な様子にケンが悪態をついて、また騒がしくなった。

機長は苦労の絶えない巨漢——酒顛に同情しつつ、「三十秒で到着する。準備は良いか」

『良いと言えば良いし、悪いと言えば…』

酒顛はタッチパネルに軽く触れた後、横にある液晶ディスプレイに向かって喋った。彼の指紋を認識し、操縦室のディスプレイ上に彼の名前と映像が表示される仕組みだ。

酒顛の困り顔に、機長達は微笑を浮かべていた。

しかし次の瞬間、そのつるりとした頭に青筋が立ったので息を呑んだ。

『うるさいぞっ…！』

割れた声が、ビリビリとヘッドフォンを震わせる。

機長は咄嗟にそれを外していたのだが、どうやら間に合わなかったようだ。耳を押さえ、呻くように、「ユ、ユー・ハブ・コントロール」「…アイ・ハブ・コントロール」副機長は苦笑いを浮かべて、操縦桿を譲り受けた。

『残り二十秒です。ハッチ、開きます』

副機長の礼儀の通った声が響いて、機内後部にあるパイロットランプが緑から赤へと変わり、点滅した。

『風速、高度、共によろし。降下ルート上に障害物見当たらず。オールクリアー』

それを確認するよりも早く、戦闘服にゴーグルをかけた酒顛達――四人の隊員は、ランプ下の大きな後部ハッチに並んで待機していた。

「そもそもアンタ、めんどくさいのよ!」

エリとケンの口喧嘩は、ますますヒートアップしていた。ハッチが開いて滑り込んだ突風に機内がかき回されても、彼らは互いを指差して文句を言い合っているのだった。

「何で一々、アンタに体臭断らないといけないわけ!?!」

「仕方ねえだろうがっ、俺だって好きでこんな鼻持って産まれたわけじゃねえんだ!」

「そんなの分かってるわよっ! レディーに対してのマナーとかエチケットとかの問題を言ってるのよ! アンタはインモラルで陰ケンなの、アンダースタンツ!?!」

「んだとコラっ!?! テメーだって、ちょっと体温高かったら、目が痛いからどっか行けとか言うだろうが! テメーはエゴイストで人類のエリ屑なんだよ!」

エリはプンとむくれて、「ヴァーカ!! ヴァーカ!! ヴァーカ!! ヴァーカ!!」

東京の夜空に、知性の欠片も無い子供の暴言が木霊した。

もう一度明記しておく。エリは今年で二十一歳になる。

しかしケンにはそれが効果覲面のように、必死になって耳を塞いでいる。

「るっせえっ、このアマ!! 耳がキンキンすんだろうがっ!!」

耳を聳するほどの風音で、酒顛にはあまり聞こえていない。

けれどもケンには、エリの声がハッキリと聞き取れる。

彼はネコ並みか、それ以上に鋭敏な耳を持っているのである。

「いいから早く行け!!」

業を煮やした酒顛が、彼らをハッチから突き飛ばした。「「ぎゃあっ!」」と汚い悲鳴を上げて高度四千メートル付近から落ちていく彼らに、酒顛はまた一つ大きな溜め息をついた。

残るもう一人の隊員が、慰めるようにして彼の肩に手を置く。

「リーダー…」

「ウヌバ。俺、胃潰瘍になりそうだ…」

「すまないリーダー。イカイーヨーとは何ダ？」

「……………」

ウヌバは、アフリカ少数民族出身の屈強な、酒顛よりもデカイナリをした男で、日本語は只今激しく勉強中の身である。

酒顛は何も言わず飛び降りた。その目はわずかに潤んでいた。

その理由が分からないまま、ウヌバも後に続いた。

＊ ＊ ＊

目的地は、東京都内のある総合病院だ。

風速がゆるいお蔭で、落下の軌道が大幅にズラされることはない。たとえ小さな敷地が着地ポイントで、どんな天候でもそこへピンポイントで降りる術があるとしても、これは面倒がなくて好都合だ

った。

彼らにとって最大の不都合とは、ただ単に思いも寄らぬ場所に降り立ってしまうことではない。そこで人目についてしまうことなのである。

およそ時速二百キロ前後で落下する中、まだエリはケンに向かって何かを叫んでいる。

彼はそれをうつとういので無視することに決めた。

代わりに、ミーティングで話された任務概要を思い出した。

——円卓がある部屋の中心に、ホログラム映像が浮かび上がる。四人を模したキャラクターが、輸送機からスカイダイビングしているシミュレーション映像だ。

『目標ポイントは、都内の病院だ。輸送機で上空まで接近し、ダイブする——』

ケンはゴーグルのテンブルに触れて、電子マップを起動させた。ひっそりとした深夜の街並みに、道路や建物の名称が表示される。もう一度触れると、真下から少し北へズレた位置に、小さく赤いエリアを確認できた。

目標ポイントの、病院の屋上である。

ハンドシグナル
手信号で隊員達に何やら伝えたケンは、空中でくると仰向けになった。さらに両腰に隠れていたレバーを引き出して、先端のボタンを押す。すると、本来パラシュートが収まっているはずのバッグから、地上方向へ大量の空気が吐き出された。

『——あとはマップで位置確認しつつ、フロート・バック浮遊機械で屋上に降りろ——』

フロート・バック
浮遊機械とは、彼らが独自に開発した、個人浮遊を可能にする機

器のことだ。

小型の特製エンジンが内蔵された箱ボックスから、圧縮した空気を噴出させることで、空中での上下及び前進運動を実現させた代物である。左右の動きは腰を捻るなどしなくてはならないが、上手く使えば奇トリ抜ツキな動きをいくつも可能にする。

それを使いこなす彼らは、反動でひっくり返りそうな胃を抱えながら、屋上へと着地した。

『————病院の屋上に降りたら三手に分かれる。俺とウヌバは、窓側を伝って対象がいる個室付近で待機。エリは屋上から院内の間を監視。ケンはペントハウスから侵入し、組織が先に送り込んでいる諜報員と合流しろ————』

ケンを筆頭に、それぞれ打ち合わせ通りに行動する。ケンは諜報員に開けられたと思われるペントハウスの扉から院内へ忍び込み、急いで合流地点へ向かった。

『————諜報員？』

『フリッツくんだ』

『ちっ、またアイツかよ』

『フリッツくん、私達の行くところ行くと絶対いるよね』

エリは楽しそうに笑っていた。

『彼はよくやっている。ハードスケジュールにも拘らず、任務は確実にこなしてくれる』

酒顔もそんな風にフリッツを褒めていたが、ケンは面倒臭そうに口を歪めていた。

『制限時間は最大十分だ。通常よりもイレギュラーが多いことが予測される。慎重に、かつ確実に遂行するぞ。キーマンはお前だ、雪町ましろケン副隊長。頼んだぞ——』

イレギュラー——一般人との遭遇や、戦時介入。

街中での任務は久々だ。気を抜いた途端に後ろからズドンということは、この国ではないだろうが、隠密に動くに越したことはない。自分達を敵と認識し得るのは、何も一般人だけではないのだから。

「つつても、アイツは…」

回想から頭を起こしたケンの目に、院内の常夜灯に照らされた人影が映った。

その人影は、こちらに気付いた途端に、「おーいつ、ケーンちゃん~~~~ん！」

子供でも知っている院内の禁則事項を、深夜二時過ぎに破り捨てるこの男こそ、組織所属の諜報員——フリッツである。彼は無邪気に両手を振ってケンを呼んでいた。

「ケーンーちゃん、こっちこっばっ!？」

ケンは飛び蹴りを決めて、彼の暴走を阻止した。

(大声出してんじゃねえよっ、イタリア人!!)

必死に声を殺して怒鳴りつけるも、フリッツは気にも留めず、「いきなり蹴り技とはゴアイサツだなあ、ケンちゃん。ついでに修正しておく、僕は生粋のドイツ人だよ」

真面目で厳格な、ドイツ人の鑑だよ。

フリッツは相変わらずニコニコした顔でそう言った。

色白で、見るからにひ弱な男だ。こんな奴が世界各地を飛び回って、実行部隊であるケン達のバックアップを成し得ているのだから、人間見た目だけで判断できるものではない。

（嘘言うな、テメー絶対イタリア人だろっ）

「…失礼だな、彼らと一緒にしないでくれよ。僕は彼らが嫌いなんだ…」

急に鋭利な顔つきになった彼に虚を突かれ、「そ、そうなのか…」とケンはいささか辟易した。

「ふう。ところでエリーは？ あ的那天山のように慎ましい胸^{バスト}を拝みたかったんだけど」

「そういうところがイタリア人っぽいっつうんだよ！」

「まあまあ、怒鳴らない怒鳴らない。病院では静かにね」

（テメーが言うかつ、テメーがよおっ!?!）

気圧された自分が情けない。

今が任務中でなければ八つ裂きにしてやるところだったが、彼はどういうわけか任務中にしか現れないので、ケンのストレスは溜まる一方だった。

「ハハハ、それより時間は大丈夫かい？」

しまった。

ケンはすぐに経過時間を見ようとゴーグルを操作した。が、『ちよっとケン、早く進みなさいよ！ 作戦時間、分かってんの!?!』エリからの通信の方が早かった。

フリッツのせいで、予定を大幅に狂わされている。

エリの役目は、屋上からケンをサポートすることだ。

ケンの能力を考えれば、この程度の任務を一人でこなすことなど造作もないのだが、リスクを無に等しく軽減する為には必要な措置だった。

彼女は屋上で目を閉じて、あるものを見ている。

彼女は目蓋の裏、もとい研ぎ澄まされた意識の中で、事細かな生体反応を把握している。建物の内部で蠢く動物や、稼動する機械から発される熱――赤外線を精確に知覚キャッチしているのだ。それは彼女の能力――《サーマル・センサー》によるものである。

彼女は熱量測定器などの機械に頼らず、体一つでそれを可能にしている。

そして他の三人も同様に、それぞれ別の、一般人には成し得ない能力を持っている。

野生動物以上に発達した聴覚と嗅覚を持つケンは、ゴーグルに付属するヘッドフォンの音量を最小にしてから、「案内しろ」とフリッツを歩かせた。

最終目的地は、この下の階にある個室だ。二人は足音一つ鳴らさないように歩いていた。その途中、フリッツは数枚の資料をケンに手渡した。

「対象のカルテのコピーだ。帰ったら清芽先生きよめにでも見せてあげてよ」

急に後ろにあった気配がピタリと止んだので振り返ると、「…おい、フリッツ。こいつはどういう了見だ？」と言って佇む、酷い剣幕のケンがいた。

フリッツにとっては予想通りの反応だった。先に用意しておいたセリフを言おうとした時、エリから通信が入った。

『階段から誰か上がってくる！』

二人はすぐに近くのトイレへ隠れた。

ケンは嫌な臭いに高い鼻を曲げながらも、接近するのが当院の若いナースだと判別した。微かに香水の香りがして、聞こえる足取りが軽かった。

「早速僕の出番のようだね。任務の方は任せたよ」

そう言って、フリッツは堂々とした面持ちでトイレから出て行った。

ナースはフリッツを見つけると、声を潜ませて彼を窘めた。

（あっ、フリッツさん！ 夜間の散歩はくれぐれも控えてくださいって言ってるでしょっ）

（OH、スママセーン。ですがラッキーでース。お蔭でこんなにキュートな妖精ちゃんに出逢いマーシタ。D a n k e j e s u s）

（ moreover, ホントに口の軽いドイツ人ねっ♪）

（男が女スキ。ソレ、万国共通、人類の必然でース！）

フリッツの軽口に、ナースはウフフと頬を染めて笑っている。

患者衣を着ていれば溶け込めるのだろうか。というかそもそも、フリッツは何の病気で入院していることになっているのだろうか。てかやっぱり奴は、イタリア人っぽいのだが…。

フリッツがナースを別の場所へ誘導するのを見計らって、ケンは無数の疑問を浮かべつつトイレを後にした。

『フリッツ君、相変わらずね。それより、さっき何か言おうとしてたけど…』

エリの通信で思い出した。力が入って、眉間にも手に持ったカル

テにもシワが寄る。

「リーダー、聞こえてるな？」

湧き上がる感情を打ち殺したような声色に、『…何だ』と酒顛は神妙に応答した。

「今回の目標が十代のガキだっターゲットてのは聞いている。ヘレティックの可能性があるから保護するってのも、組織としての筋が通っていると思えば納得する余地がある。だけど…」

ケンはズカズカと廊下を歩いて、一つの扉の前に立った。静かに開けて、唇を震わせた。

「だけどなあつ、記憶喪失のガキをパクれとは一言も聞いてねえぞ…っ！！」

『記憶…喪失……！？』

メンバーの顔色が変わった。

彼らにとって、ヘレティックという言葉は特別で、それに属する者達は残らず保護の対象となる。

標的が病院の個室に入院していると聞き、彼らは間違いなく重症患者だと予感していた。

敵に襲われた可能性も考えていた。

子供だアイデンティティというのを知って、保護するのに気が引けてもいた。

しかし、存在意義を失っている者を相手にしろとは寝耳に水だった。

「おい、こんなガキ連れ帰ってどうする気だ！？ 記憶が無いのを良いことに、マインドコントロールでもやろうってのか！！」

ケンは病室の窓に向かって怒鳴り散らした。

閉じられた窓の外には、酒顛とウヌバの姿がある。彼らは安全帯ハーネスから伸びるロープで、屋上からぶら下がっている。

窓越しの酒顛の口が動き、『任務は絶対だ』とヘッドフォンから響いた。

『我々が背負っているのは、特定された一国家の命運ではない。世界の、全ての未来だ』

それは痛いほど知っている。産まれた時からずっと、身に沁みて味わってきた。

自分に流れる血は、その全てを教えてくれていた。

『我々は、それを背負えるだけの力を持っている。その力を正しく行使して、世界の確実に豊かなる進歩の礎となる。小さな任務でも、その為の歯車の一つだ。どんなに過酷でも、ミスをするわけにはいかない…』

「この呑気に眠ってるガキを持ち帰ることが、世界の為になるのか…!?」

室内に一つだけあるベッドに、十七歳の少年が眠っている。

彼に複雑な顔を向けるケンの様子は、部屋の隅に設置された監視カメラにも見られている。

しかしそれは、フリッツによって事前に画像処理されているので、実際の映像として録画されることはない。

『少なくとも、彼の為にはなる。彼がもし本当に、我々と同じヘレティックであるならば、敵対する何者かに狙われることになる。万一、その力が悪用された時、彼を殺すのは我々だ。俺は、そちらの

方が耐えられん…』

大いに有り得るケースだ。

彼らの世界では、ヘレティックの奪い合いは日常茶飯事だ。殺し合いもあれば、家畜のように高値で売買されることだってある。

そうなる前に保護するのが、彼らの仕事の一つだ。

ケン は納得したのか、はたまた己を殺したのか、しぶしぶ窓を開けて、酒顛とウヌバを部屋に入れた。

巨体を揺り動かす彼らの背中を月明かりが照らし、薄暗い病室で眠る少年の上に大きな影を落とした。

「ケン、お前は間違っていない。だが俺達のいる世界では正しい判断ではない。これは、力を持った者の宿命だ」

ギツと歯軋りを立てるケンをよそに、酒顛は廊下に目をやった。

「フリッツくん。良ければキミも、彼の為に祈りを捧げてくれ」

バレたかといった具合に、フリッツが現れた。

先程のナースを、ナースステーションで眠らせてきたらしい。仕事に差し支えない程度に、短時間だけ眠らせる麻酔薬を使ったのだ。

「そういうの苦手だけど、酒顛さんに言われたら断れないねえ」

酒顛達は少年に向かい、またエリは屋上から深く祈った。

「彼の未来に、不滅の光があらんことを…」

* * *

酒顛達は少年を麻酔で、さらに深い眠りへと誘なった。

酒顛は彼を軽々と担ぐと、窓から屋上へ引き返した。心地良さそうに眠る彼の寝息が、彼らの良心を酷く揺さぶった。

一同が部屋から出て行くと、フリッツはその窓を閉めてから病室を後にした。

低空飛行の輸送機が無音で近付き、屋上のヘリポートの真上で空中待機する。ハッチから縄梯子が垂らされてきて、酒顛達はそれによじ登っていった。

侵入時にスカイダイビングしたのは、輸送機が特定のポイントで二度も止まらないようにする為だった。

彼らが少年を連れて峙へ帰っていった後、フリッツは院外の公衆電話から連絡した。

「予定通り、任務成功しました。ええ…ええ……え、今からですか？ いえ、問題ありません。セーフハウス放棄後、すぐに向かいます」

また仕事だ。

また、嫌な仕事が入った。

今度も、胸糞が悪くなる仕事だ。

「……クソつたれ共がっ!!」

フリッツは柔和だった顔を豹変させて、受話器を投げつけた。

弓形の月が浮かぶ、春の暮れのことだった。

「プロローグ」(後書き)

どうもT・Fです。

後書きはフランクにいきましょうか。

今回はとりあえず「プロローグ」を投稿しました。

今後、「二」→「五」→「エピローグ」という流れで【第一章】を連載していきます。

正直なところ、書き貯めができていないので、投稿スピードは遅いかと思います。

かてて加えて遅筆というスペシャルな特性。

参ったね、こりゃw

書き貯めができていない理由としては、小説賞への投稿に力を入れすぎたせいですね。

だから次々新しい物を書いて、書き貯めができなかったというわけです。

言い訳ですね。

まあ、それはさて置き、前書きでも述べましたが、せっかくなので可愛がってください。

何分お堅い作風ですが、形にはなっているかと思います。

細かいところは皆さんにお任せします。

もう自分では分かりませんw

おっと、肝心の「プロローグ」に触れてなかった！

すみません。

作品名の「ネームレスって何？」とか、「で、主人公どいつよ？」と思われたことでしょう。

それは次回投稿します「二」にて明らかになります。

本当にすみません。

「プロローグ」では、謎の特殊部隊が、記憶喪失の少年を拉致する

という、いかにもありがちな流れになっています。

その目的は？ 少年は何者？ 流れに乗れねえ！

みたいな感じですが、そこはやっぱり「プロローグ」のご愛嬌ってことで。

あまり長くなってもしょうがないですね。

お疲れ様です、ここまでご覧頂きましてありがとうございます。
それでは次回の投稿まで、さようなら。

P. S. 最近寒いので、お身体にはお気をつけください。

〔二〕（前書き）

一話目です。

長い作品です。

気長に付き合ってください。

首を長くしてお待ち頂けるような作品を目指してゆきます。
どうぞ、よろしく。

〔二〕

——暗闇が広がっている。

茫漠とした黒が、視界を埋め尽くしている。

少年はそれを呆然と眺めていたが、そうしていることが急に恐くなって、人を呼んだ。

誰かいらないのか、どこなんだここは。

しかし返事は無い。

木霊するばかりの自分の声に絶望し、自分はどこにいるんだと頭を抱えた。

そうじゃない。

少年は顔を擡げて思い至った。

分からないのはこの場所のことでも、置かれた状況のことでもない。本当に分からずにいて、本当に知らなくて、本当に知りたがるべきは——自分自身のことだ。

少年は混乱した。錯乱と言ってもいい。

自分は誰だ、何者だと叫び、喚き、喘いだ。

答えてくれる人がどこにもいなくて、少年はその場で頹れるほかなかった。

怖い。誰か助けて。

ボクを、教えて…。

信じた憶えのない未知の存在に乞うた時、目の前に小さな光が射し込んだ。

その中に見覚えのある誰かの後ろ姿を見て、少年はその人の名を呼んだ。

そうした途端、忘れていたことを全て思い出した。

自分が何者で、どうして忘れてしまっていて、何が突然襲いかかってきたのかも——今まで記憶してきた全ての情報を思い出した。

少年は駆け出して、叫んだ。光の中にいる、彼女の名を叫び続け

た。

彼女は艶やかな髪を靡かせて、こちらへ振り向いた。逆光で顔が見えない。

その顔を見せてほしい。いつも不安だった自分に、癒やしと安らぎを与えてくれたキミの笑顔を、もう一度見せてほしい。

縮まらない距離にもどかしさを覚えながら、少年は懸命に手を伸ばして——叫んだ。

「————っ!!」

* * *

白い世界を掴むように、汗ばんだ手があった。天井に伸ばされた、少年の細い手だ。

不純物の一切を取り除いたかのような白い天井から、電灯が強い光を放っている。

悪夢から覚めた少年は、伸ばしていた手をゆっくりと目の前に置いて遮光した。

ここはどこ…、いや、だから、そうじゃなくて——

「目が覚めたようだね」

「……う……？」

仰向けのまま首を左へ捻ると、白衣を着た眼鏡の男が椅子に腰掛けていた。

若くて、優しそうな人だ。

「ずいぶんと魘されていたけれど…大丈夫かい？」

「…誰、ですか？」

寝起きの少年は頭が回らなくて、質問に質問で応えてしまった。

しかし男は不満な顔一つせず、少し笑って、「僕はこの施設の医療主任だよ。そしてここは僕の部屋…」と背凭れに身体を預けて室内を見渡した。

少年はそれに釣られて首を回らせた。そうして初めて、ベッドで寝ていたことに気付いた。

「と言っても、見てのとおり医務室なんだけどね。ここが一番落ち着くんのだ」

「…医務室。病院じゃないんですか？」

意識はハッキリしている。冷静に話を聞けるし、言葉のニュアンスの違いも判別できる。

医師は少年が意外と落ち着いていることに驚くと、「カルテは読んだよ。少し、診察しようか」おもむろに聴診器を耳に掛けた。

視診。聴診。触診。そして打診まで、体一つでできる身体所見を全て終えると、医師はもう一度カルテに目を通した。本来あるべき場所から無断でコピーされた、彼のカルテを。

「うん、問題無いね。えーと、名前は…」

「早河…さがわ まいこ誠、という名前らしいです」

らしい、か。

医師は沈痛な想いを隠し、「憶えていないのかい？」

「……色んな人に訊かれましたけど、何も、思い出せません」

名前も憶えているが、これは憶えているとは言えない。知らされて、知っているだけだ。

医師は少し眉をひそめると、「そう…」とカルテを裏向きにして

机の上に置いた。

「間違えていますか…?」

「いや。キミは正真正銘、早河誠くん本人だよ」

「よかった…」

心底から安堵した顔は目も当てられない。見た目のひ弱さ以上に、臆病なメンタルの持ち主である医師は、耐え切れずにカルテをファイルに挟んで、棚に直した。

「先生は、知らない先生ですね」

意表を突かれた医師は、机に向かったまま固まってしまった。

落ち着け。嘘は慣れていないがシラを切り通すんだ。ほんの少しだけ効力がある嘘をつけば、それで済むんだ。

「キミは…その、病院を移ったんだよ。もっと高度なりハビリができる、ここにね」

「寝ている間にですか」

「そうだね。事前に通知できていればよかったんだけど…。驚かせて悪いね」

「いえ、そんなことは…」

誠は少し顔を俯けて、「…先生。これからボクは、どうすればいいんでしょうか」と幼い子供が自信無くこぼすように言った。

「それは——記憶を取り戻すには、ということかな？」

「よく…分かりません。きっとそうした方がいいんでしょうけど、意欲が湧かないんです」

失った記憶の価値さえも解らないのだから、それも仕方ないか。
ならばと、医師は思った。

人の記憶には、一体どれだけの値打ちがあるのだろうか。彼が失った記憶は、どこに落ちて、誰に拾われているのだろうか。

空想が空想を呼んで、医師は場違いに自嘲した。

医師という名の、一端の科学者のくせに何を言っているんだ。記憶は、彼の中にしかない。早河誠は、その仕舞い場所を忘れていくだけに違いないのだ。

しかしと反論するもう一人の自分がいる。直感が、どうしてもそれを譲らない。

そうして一人難しい顔を浮かべて思案する医師を見て、誠が首をかしげている。

結局、医師は益体もない疑念について深く考えるのをやめた。

誠は少し情緒不安定なきらいがある。もっと錯乱している方が普通な気さえする。他人事のように笑っている男の首を絞めてもおかしくない。

しかしそうじゃないなら、やりやすい。

「運動しようか」

「運動？」

「そう、身体を動かすんだ。幸い掠り傷程度の軽症だし、安静にしておくと気が滅入るのなら、元氣が出ることをした方がいい」

医師は有無も言わず、「さあ、行こう！」と誠の手を引いて、医務室を出た。

「あ、あの…。先生、お名前は…？」

「清芽^{きよめ}ミノル。みんなは清芽先生と呼んでくれるよ」

* * *

別室。

いくつもあるモニターに、誠と清芽の顔がアップになって映っている。彼らの今のやりとりを、監視カメラがリアルタイムで撮影した映像だ。

それらを眺める丸坊主の巨漢——酒顛しめてんドウジは、腕を組んでうなずいた。

「さすがは清芽先生。上手く誘導してくれたな」
「オッサン、ボスは何て言ってるやがった」

銀髪で三白眼の男——雪町ゆきまちケンが訊いた。
酒顛は肩をすくめると、聞いたままを口にした。

？御苦労、次の指示があるまで待機。次の任務も最善を尽くせ？

組織の長——ボスと呼ばれる初老の男は、広々とした室内の一番奥にある執務机に座って、そう言った。ロマンスグレーのオールバックヘアーに、背後の壁一面に据えられた強化ガラスから射し込む光が反射して、いっそう厳めしく見えた。

「もはや名言化してますね。いつもそればっか」

細身でポニーテールの女——エリ・シーグル・アタミが苦笑する。
ボスは、感情を表に出さない男だ。彼女に至ってはここ数年、先のセリフ以外聞いた覚えが無いし、ニコリともしないあの鉄仮面にはゾッとするのだった。

それでも、彼の掲げる思想や理念にだけは共感できた。

この組織がいつから続くものかは定かではないが、世界の為に見返りを求めずに、粉骨碎身の覚悟で戦うという度を越した献身さに

は、感動さえ覚えたのだ。

エリは、こんな自分にもできるのだと、組織の存在に感謝していた。

「しかし、今回はコレを渡された」

酒顛は一枚の有機ELデータファイルを見せた。そのA4紙のうにペラペラとした半透明のフィルムは、触れるだけでパソコンのディスプレイのように多くの情報を映し出す。この一枚に、週刊誌一冊分の情報を記録できるというから驚きだ。

エリはそれをタッチパネルの要領で触って、画面をスクロールし、
「何ですか、コレ？」

「早河誠の、大まかな来歴だ。例のバグという人物が得た情報らしい」

「…あの人、一体何者ですか？ 大体ボスだって、変声器越しの声
としか喋ってないんですよ。性別さえ分からない相手の情報をま
ともに信用し続けて、大丈夫なんですか？」

「俺に言われても困る。そもそも、ボスも疑っている。ああ見えて
あの部屋の中では、凄まじい心理戦が繰り広げられているという話
だ」

「マユツバって感じいゝ」

バグという人物は、近年突如として現れたやり手の情報屋だ。

どこで嗅ぎつけてきたのか、いきなり組織の回線に割り込んで情
報提供してきたのだ。見返りはいららないと言うところがまた、彼ら
の不信感を煽っていた。

それが何度か続き、その情報のどれもが組織が知り得ないものば
かりであった為に、組織の誰もが彼を危険視しているのだった。

「バーグのことはいい。それよりもエリ、今回の提案はボスも認めてくださっているが、その上でこのデータを渡された。信じきる必要は無いが、頭には入れておけ。彼という一人の人間を見極めて、正しいものだけを取捨選択するんだ」

「するんだーって言われても、すぐにはできませんよ、そんなの」

「時間は気にするな。彼の記憶が戻るまで続けなければならんだからな。それにこれは俺達全員で行なう。彼に直接関わることになるであろう我々と、清芽先生達でな」

「それ考えたら今回の作戦、かなり信用性欠いちゃう気がするんですけど…」

「今更何言ってやがんだ。ここに連れてきた時点で、信用なんて欠片もねえだろうがよ」

舌打ちの後に、ケン是这样言った。鋭い目が、酒顛に向けられる。

「ケン。言っておくが、俺だって今回の任務の真意は一切聞かされていなかった」

「俺はな、こんな任務まで引き受けちゃうことはねえって言ってるんだ」

あの小さかったケンが、道徳的な話をするまでに成長したのは、酒顛にとっても大変喜ばしいことだった。

しかしこの頑なな正義感は、これからさらに彼を追い詰めてしまう予感がした。

だから思わず、「追い過ぎるな、あの人の影を。誰もあの人のようになれはしないんだ」

かつて英雄と呼ばれた男の姿を、思い浮かべてしまった。

「バカヤロウ、そういうんじゃないよ」

エリは、そう言って部屋を出ようとする彼の腕を掴んで、「待って、ケン！」

「んだよ…っ」

「作戦はもう、次のステップに移行してる」

「…分かってる。テメーのくだらない段取りに付き合えばいいんだろ」

「っ、付き合う…の…？ 私達…」

古い少女マンガのヒロインのような顔をして固まった。目が必要以上に黒光りしている。

「気色悪い勘違いしてんじゃねえよ！ 述語だけ拾うなタコ！」

長い通路をそそくさと歩いていく彼の背中に、「気色悪いって何よ、犯罪者面！」

むくれた顔で部屋に戻る彼女に、酒顔は再度確認した。

「エリ、任せていいんだな？」

フグのようだった頬を萎ませて、エリはウインクを返した。

「もっちゃん、二人は適当に見ててください♪」

無口なウヌバは、アフリカ民族展の蝋人形のように、室内の隅で静かに佇んでいた。

＊ ＊ ＊

広い室内で、ウィーンとベルトコンベアが無機質な音を鳴らし続

ける。その音に乗って、苦しそうな息遣いが聞こえる。

「きつ、きよつ、め、せんせ……いっ！」

『何だい、マコトくん？』

「あのつ、ボク、病み上がつ、病みっぱなしなんですけどっ!!」

『そうだね。と言ってもキミは、記憶を少しばかり失っているだけで、理想的な健康体だ』

「それが何だって言うんですか！」

誠は声を荒げた。

彼は、長い長いランニングマシンの上を延々と走らされながら、天井にあるスピーカーに向かって、清芽に抗議しているのだった。

その様子を、清芽は楽しそうに眺めている。彼はすぐ隣の部屋から、窓越しに話しかけている。誠からはただの白い壁に見えるが、清芽のいる部屋——研究室からは、マジックミラーで筒抜けになっているのだ。

ラボ側では十数名の研究員が、PCパソコンのモニターと誠の様子を忙しなく交互に見比べている。端的に言えば、彼らは誠の身体機能を徹底的に分析している最中なのである。

「メギイド博士、いかがですか？」

清芽はすぐ隣で作業する、一際年配の研究者に問うた。

すると、西洋の古典文学に出てきそうな古めかしい顔立ちの白頭翁——メギイドは、モニターと向き合いながら、「一般人ノーマルだ。いたって普通。普通すぎるくらいに普通。覚醒の予兆も無い」そうして伸びをすると、酒顛達の骨折り損だったという顔を、清芽に向けた。

「経歴はそうでもないんですけどね」

清芽は、ついさつき酒顛から渡された有機EL資料を、メギイドにも見せた。早河誠の素性が、簡潔に記されている。中でも彼自身ではなく、彼の家系は奇妙だった。

そこでメギイドは目を細くして、「：サガワという姓は、日本では珍しいのか？」

「この字の並びでサガワと読ませるのは少ないでしょうね。ハヤカワと読ませるのが普通です。まあ——私が言うのも何ですけど」

「ふむ。それにしても、短命な血筋だな。テロメアが短いというわけでもあるまい」

「ええ……。ほとんどが若くして大病か、不慮の事故です。事実どうであるかは不明ですが、彼には親族がいないという事実だけは、こちらの捜査で証明されています」

「まさに、天涯孤独か。よくある話ではないか」

「そうでしょうけど」

「貧困や戦争から孤児が生まれることは、普遍的な社会問題の一つとして世間では認知されているではないか。今では少年兵がピックアップされるケースが多々あるが、それは我々が生まれる遙か昔から起きていた、ごくごく普通の出来事だ。それに比べれば、我々の誕生こそが、彼らにとっては由々しき事態であるはずだぞ」

「ですが、孤児というものは——」

フンと清芽の言葉の先を折り、老人は窘めるように言った。

「優しいな、お前は。しかしキヨメよ。親がいる人間が、いない人間に対して行なう同情は、虐待よりも酷い体罰だということを忘れてはならんぞ」

「……………」

「一つの種から離れた我々は、持つ者と持たざる者の価値観の相違

点を知らなくてはならない。シュテンがよく言うだろう、？力を正しく行使しろ？と」

「しかし身寄りも無く、過去の記憶も無いというのは、あまりに残酷です…」

「無力であつたならな。しかし、我々と同じならば、その不幸さえも超えられる」

「博士は、我々の可能性を信じていらっしやるのですね」

「人の遺伝子が、我々にこう在れと願い、形にしたのだ。進化とはそういうものである。人間が猿から、いや、深く遡れば海に芽生えた共通祖先が、本能から形を変えようと願ったのだ。そうでも思わなければ、我々が生まれた意味が無い。存在意義も、何もかもナンセンスになる。存在を否定されるこそが、この世の最大の不幸だ」

「この世の——不幸…」

息を切らしながらコンベアの上を走り続ける少年が、よりいっそう不憫に見えた。

「組織が…」

「うん？」

「組織がこうして、いとも容易く彼を拉致できたのは、彼に身寄りが無かったからでしょう。ですが、分かりません。どうして、覚醒前に発見できたのか…」

メギイドは睨みを利かせ、「つまらん穿鑿はよせ、キヨメ。為にならんぞ」

清芽は黙って、誠を見た。

もしも宿命を知らせる術があるなら、あの少年だけでなく、どれだけの人を救うことができるだろうか。それができない自分が情けない。

清芽は堪らず、誠に話しかけた。

『マコトくん。もう少し、頑張れるかい？』

非情なことを呑気に告げる清芽に、「ええっ、いつまで…!？」と誠は半泣きで叫んだ。

その瞬間、巨大な爆発音と震動が彼らを襲った。施設一帯に、白煙が広がっていく。

「な、何が…？」

ベルトコンベアが急停止して、誠はその場で蹴躓いた。緊急事態を示す赤いランプが明滅し、ブザーがけたたましく鳴り響く。そこへ通用口を使って清芽が駆け寄ってきた。

「マコトくんっ、逃げるんだ！」

「せっ、先生!？ 何がっ、えっ!？」

清芽は切迫した様子で、混乱する少年の両肩を掴み、「落ち着いて聞いてくれ! テロリストがここを襲ってきたんだ!」

「テロリスト!？」と誠は目を白黒させた。

何を言っているんだ。それはテレビの中だけの話じゃないのか。

しかしこの白い煙は、そのテレビでも見たことがある。慌しい様子も。

自分のことは思い出せないのに、何故かこういうつまらない知識だけは、しっかりと憶えていた。

「そ、そうなんだ! 狙いは分からないが、一般人のキミを死なせるわけにはいかない!」

「で、でも——」

パンッ！！ タタタンッ！！

弾ける音が連続し、それが銃声だと理解したのも束の間、「うつ
！」目の前の清芽が、呻きながら誠に覆いかぶさってきた。

「先生！？」

「ぐうううっ」

口から血を吐いている。白衣が胸元から血に染まっている。

誠は目を剥いて震えた。

清芽先生が、銃で撃たれた。

「行け…、逃げるんだ…：…！」

清芽は苦しみながら立ち上がると、誠をラボの外へと追い出した。

「行けえっ！！！」

誠はどうすることもできず、ただただ煙に包まれた通路を走って
いった。

しかし、清芽を置き去りにしてしまった罪悪感が脳裏を掠めた。
踵を返そうとしたが、そこへまた銃声が轟いた。

「までWait！」

までWait！！」

煙の向こう——ラボの方をよく見ると、真後ろからガスマスクを
被った戦闘服姿の連中が駆けてきていた。

英語だ、外国人のテロリストだ…！

降伏して助かる見込みが想像できず、誠はとにかく逃げた。

逃げる方向にも煙が充満していた。行き先が見えなくて闇雲に走った。左肩が壁にぶつかって、そのままそれを伝った。まだ遠くで叫び声と銃声が連続している。時折、床が揺れて、天井も軋んでホコリが落ちてくる。

誠の神経は衰弱しきっていた。今回のことだけでなく、最初の病院で目覚めてからずっとだ。医者を名乗る中年の男や、少し疲れた顔のナース、警察を名乗る人まで現れて、色々と矢継ぎ早に、のべつ幕なしに質問された。

分かりません。何も分からないんです。ごめんなさい…。

たった三日で、それが口癖になってしまった。

本当に分からないからしょうがないと思う反面、何故分からないんだと苛立ちを隠せなかった。自分は知らないのに、他人は自分のことを知っているという奇妙さが怖くて、病院からあてがわれた個室から自ら出る気にはならなかった。面会謝絶にしろって、知り合いを名乗る男女が部屋の外で諦めて帰るのを何度も聞いた。

そんな中、一人だけしつこい人がいた。一時間に一回のペースで、自分を尋ねてきた。

声で、女の子だと解った。どういうわけか、聞き覚えのある声だった。

誠は悩んだ末、明日その子に会ってみようと思って眠りについた。そうしたら、ここにいた。

そうしたら、こうして逃げている。

どうしたら、こんなことになってしまうんだ。

彼女に会おうとしたのが良くなかったのか。いや、そんなことは関係無いはずだ。

どうなろうと、変わるわけがない。

今更、変わるわけがない。

「誰か——助けてよ…っ！」

無性に、彼女に会いたくなった。

自分を知るといふ、声しか知らない彼女に会いたくなった。

この混乱した状況から救い出してくれそうな、声しか知らない彼女の手を求めた。

「キミっ、コッチよ！」

煙の中から手が伸びてきて、誠を右へと引っ張った。壁にぶつかって顔を上げると、ポニーテールにインテリ眼鏡を掛けた綺麗な女性、彼の手首を掴んでいた。

「ア、アナタは！？」

「私はここの研究員です。とにかくここから離れましょう」

清芽とは別仕様の白衣を着た女性だ。彼女は、？と表記されたボタンを押してニコリと笑った。

誠が無理矢理に引き込まれた場所は、エレベーターだった。扉が閉まり、エレベーターは最下階を目指した。

「な、何でテロリストが来るんですか！？」

「分からないわ」

「ここ、どこなんですか！？」　ボク、病院にいたはずなんですよ！でも、清芽先生は医務室だって言って…、その清芽先生も、目の前で……！」

「人が死ぬところを見るの、初めて？」

「そりゃそうですよ！　…いや、分かりません。思い出せません…！！！」

誠は悔しそうに歯を噛み、頭を抱えて座り込んでしまった。何も思い出せないことと、清芽がテロリストに殺されたことが

ゴチャ混ぜになっているのだ。

女は彼を気遣い、「安心して。このまま下まで降りたら、ちゃんと逃げられるから」

「ホントですか…?」

「ええ、必ず」

誠は、思わず見惚れてしまうほどの微笑を信じることにした。

幸い、エレベーターは途中で止められることなく一階まで辿り着いた。扉が開く時はさすがに緊張したが、薄暗い空間に人の気配は無かった。

それでも誠は、女の背中にピタリとくっつき、そろそろコンテナの影に身を隠した。

「ここって…」

「ポートエリアよ。と言っても、水上艦じゃなくて、潜水艦の港」

誠は耳を疑った。潜水艦だって…?

「テロリストはきっと最上階から来たから、潜水艦で逃げれば助かるわ」

女から距離を置いた誠は、訝る目を向けた。

「…どうしたの?」

「せ、潜水艦なんて、どうして持ってるんですか…?」

「さあ、どうしてだろうね」

「答えてくださいよ! どうして潜水艦なんて持って——っ!?」

ダンッ!

再び大きな音が耳を打った。頬に、何か跳ねた。途端に、目の前の情景がガラリと色を変える。ドロリとした原色に近い赤色が、広がっていく…。

「マコト・サガワだな？」

女の真後ろに立つ男は、彼女の肩越しにそう言って、鋭い眼光を突きつけてきた。

「え…あ……」

女はゆっくりと膝をつき、地べたに寝そべって起きなくなった。頬に跳ねた何かも、一緒に地面に流れて落ちた。赤い…コレも――
「血……」

何だ、次から次へと…。何なんだ。死んだのか、死んでしまったのか、この人は…！？

動転する誠に、三白眼の銀髪男は言った。北欧系の顔から発された言葉は日本語だった。

「テメーを見極める。死にたくなかったら、知恵を絞ってみろ」

言うや、銀髪男は彼の足元を撃った。

「ひうっ！」

「足をすくませてる場合じゃねえぞ」

誠はまた逃げ出した。

どうしてこんなことになってる。

夢か。夢じゃないのか。夢なら早く醒めろ。

ボクは何も悪いことなんてしてないんだから…！

無数に立ち並ぶコンテナの一つを選んで隠れて、そんなことを心の奥で訴えた。

だが、どうにも自信が無かった。
記憶が無いからだ。

「ボ、ボクは何者なんだ……。もしかして、犯罪者なんじゃないのか……？」

そう思うと急に頭痛がして、頭を押さえた。電流か、虫のような何かが、好き勝手に脳内でのた打ち回っているような激痛が走る。

——夜道。

三叉。

女。

口。

巨大物質。

クラッシュ。

誰……手……？

断片的な映像がスライドショーのように浮かんでは消える。

何だこの光景は。ボクの、「何だ……？」

ふと前を向くと、緑色のコンテナの脇に一本の鉄パイプが立てかけられていた。誠はそれを拾うと、ブンと一振りした。手頃なサイズで、重さも丁度いい。

誠の精神状態はすっかり疲弊し、病んでいる。そんな彼は、思い至る。

どこをどう行っても逃げられないなら、あの男を倒すしかない。

「……ふう……」

誠は深呼吸の後、コンテナの側面に張り付いた梯子を登って身を屈めた。

ズカズカと道を行くあの男を発見し、先に拾っていた鉄片を彼の視界に投げた。

物音に男は銃を構えると、一転してそろりそろりと足を忍ばせて音源へと近付いていく。

誠はまんまと引つかかってくれる男の死角を奪い、タイミングを見計らって飛びかかった。銀髪を縦に割る勢いで鉄パイプを振るった。

やらなければという正義感で、恐怖はどこかへ消し飛んでいた。

「一般人ならこんなもんか」
パンピー

男は失笑すると、誠の奇襲をさらりと躲した。あえなく鉄パイプがコンクリートの地面にぶつかって甲高い音を鳴らす。

誠がマズいと思ったのも束の間、男は鉄パイプを踏みつけると、彼を軽く突き飛ばした。

手から離れたパイプが遠くへ転がる。

「あうっ！」

「死にたくなかったら知恵を絞れつつたろ。次ミスったら容赦しねえぞ」

「何なんですか…！」

理不尽にも程がある。

誠は男に殴りかかった。

「何なんですかアナタは！ 何が目的なんですかつー！」

しかし軽く受け止められ、またもや突き返された。

「極限だな」

「ひ、他人事みたいになっ」

「そりゃそうだろう。テメーの人生だからな、俺が介入することじゃない。だが俺にも俺の人生とポリシーがある。それを邪魔するのなら、排除するだけだ」

「排除って、横暴じゃないですか!」

「世界は理不尽だ。テメーが突然記憶を失ったように、状況は唐突に変わって、俺達を強引に呑み込んでいく」

「アナタにボクの何が解るんですか!」

「解りゃあしねえよ。だが現状で一つ解るのは、その横暴や理不尽を押し退けるには、テメー自身が行動を起こさねえといけねーってことだ。違うか?」

抗うんだよ。

そう言っつて男は、おもむろに戦闘服の胸ポケットから何かのスイッチを取り出した。躊躇なくそのボタンを押すと、爆音が頭上から降り注いだ。凄まじい震動が立て続き、遠くで白い靄が吹きこぼれる。

間違いない。上の階で、爆発が起きた。

「あゝあ。テメーがさっさと捕まらねえから、また大勢死んじゃったなあ」

「ボク…が?」

「そうだ。全員、テメーを守る為に抵抗していやがった。テロリストのリーダーである俺は、上で捕らえた奴らに約束していた。?もしもマコト・サガワが大人しく捕まれば、テメーらの命は助けてやる?ってな」

「そ、そんな…」

「あゝあ。テメーのせいだ」

誠は膝について項垂れた。

「そんなの、ズルいじゃないですか…。さっきはわざと見逃したく
せに……」

「知恵を絞れと言っただけだぜ？ テメーが勝手に逃げて、反抗し
たんだろ」

「…どうして、ボクの為に……？」

「俺には解らねえ話だが、一般的には、大人が子供を守るのに理由
なんてねえんだろ」

解らなかった。急に解らなくなった。知っている大人の顔を、十
人も思い出せない。その中に、子供を守る大人——親と呼べる人の
顔は無かった。

「…そのまま抵抗するなよ。そのまま、死んだ連中の想いを蔑ろに
しろ」

病院にいた先生やナースは、とにかく自分を心配してくれた。だ
けど、欲しい温かさではなかった。事務的に職務をこなしているだ
けに思えた。

清芽先生や研究員の女の人は、何を考えているのか解らなかった。
この謎の施設で働いているということが不信感を煽るのだろうけれ
ど、何かを隠されているようで、どうしても信用しきれなかった。

「しかし、ただのゲームのつもりだったんだが、イマイチ面白くな
い結末だったな」

ぼんやりした頭に、不快な単語が響く。

ゲームって、どういう意味だ。

「そう言えば、あの医者はやたら五月蠅かったな。腹撃たれたくせ

にいつまでもテメーのこと気遣って。庇ったところで何にもなりやあしねえのに……。うぜえっいたらなかったぜ」

グウンッ！！

何かが勢いよく膨らんだような音が鳴り——弾けた。

同時に、男の腹に巨大な鉄の塊のようなものが飛び込んできた。凄まじいスピードで突進してきたその正体を確かめたのは、コンテナの壁に背中を打ちつけてからだった。

「テ、テメー……!？」

一体何が起こったのだろうか。

誠が、一瞬消えたように見えた。気付いたら、タックルされていた。

衝撃で凹んだコンテナの壁に身体を支えて立ち上がる。口から溢れそうになった胃液を意地で押し戻すと、男は少し離れて倒れる誠を睨んだ。

「何しやがった……!」

「……ボクは」

男は両腕を身体の前に置き、腰を落として身構えた。その手に銃は無く、ボクサーのように空の拳を握った。体勢を維持したまま、膝について肩で息をする誠へにじり寄る。

「来いよ。俺もこんな面倒な仕事はさっさと終わらせてーんだ」

「ボクは……」

「力、見せやがれえっ!」

ボクは——死にたくない。

顔を上げた誠の目は血走っていた。

その様子に気圧された男――雪町ケンの、それ以降の記憶は曖昧だ。

また何かが弾けたような音の後に、誠が視界から消えた。寸秒の後、耳に何か息遣いのような声が聞こえた。振り返ると誠の姿があった。鉄パイプを振り上げて飛来する、誠の姿だ。

「コイツは……っ!!」

「ケンっ!!」

ケンの常人離れた知覚さえも凌駕するスピードだったのは、全てを目撃していた研究員の女――エリ・シーグル・アタミの目にも明らかだった。

ケンは突然真後ろから現れた少年に鉄パイプで殴られていた。

少年はあの一瞬で、遠く離れていた鉄パイプを拾って、それをしていたのだ。

反射的に防御しようとするケンの左手は間に合わなかった。後頭部に走った激痛に、目玉が飛び出そうになっていた。彼はそのまま受身も取れずに地面に額を打ちつけて、脳震盪を起こして気絶した。そこで張り詰めていた糸が切れたのか、誠も自分の驚異的な加速度を忘れて、空中で気を失った。地面を転がっていき、壁にぶち当たっても悶えることはなかった。

エリは立ち上がると、口元からダラリと垂れる血糊を拭いた。呆然と湛える目は、誠から離れなかった。

「リーダー、今のは何ですか……?」

コンテナの影に身を隠す、二つの大きな人型の熱源に対して彼女は言ったつもりだ。しかし返事が無い。焦れた彼女は、彼らの下へ足早に近寄った。

「そこにいるのは分かってるですよ、リーダー…あっ!？」

エリは声を失くした。

隠れていたのは紛れもなくエリやケンが在籍する、組織の作戦部第一実行部隊を率いるチームリーダー——酒顛ドウジだが、その厳しい顔の固そうな頬を、大粒の涙が伝っているのである。

彼に付き添うウヌバも、息を吞んで困惑している。

「ど、どうしたんですか…？ 鬼の酒顛リーダーが、そんな…」

「死んでいなかった…」

「はい？」

眉をひそめるエリを無視して、酒顛は天井を仰いだ。

「？あの人？の気高い志は、死んでいなかった…!」

彼らの声に聞き耳を立てていた清芽も、背筋を粟立てていた。酒顛が言う？あの人？が誰なのか、早河誠のエキセントリックな行動を見れば一目瞭然だった。

だが、何故だ。

何故彼は、覚醒前の彼は、組織に目を付けられたのだろうか。

いや違う。バグは何故知っていたのだろうか。

彼が、ヘレティックとして覚醒することを…。

答えの出ない自問に、清芽は腕を扼した。

＊ ＊ ＊

『————マコト!』

下足ホールで、少女が呼び止める。

振り向いた拍子に、履きかけていた靴の踵を潰してしまった。せっかく大事に使っていたのに、酷く気分が悪くなってしまった。

『何だよ、下の名前で呼ぶなって言ってるだろ。もう園児じゃないんだから』

『帰るの?』

聞いてないし。

少年は不満を浮かべながら、『…見れば分かるだろ』

『じゃあ私も一緒に帰ろう〜っ』

そう言って彼女は、下足箱から運動靴を取り出して、替わりに脱いだ上履きを仕舞った。

鼻歌交じりの彼女に、『一緒になって何だよ』と不機嫌に問い質した。

『いいじゃん、別に。どうせスーパーに寄るんでしょ? 私もちょうど用事あるし』

『勝手に決めんなよ』

『でも、凶星でしょ?』

グッと詰まった顔をした少年は、『… お前、どっちのスーパー行くんだ。へさきスーパーか、クドームイカドーか』

へさきスーパーは、西の木之村屋と双壁を成すと言われている高級スーパーだ。対してクドームイカドーと言えば、リーズナブルな価格設定で愛されている総合スーパーである。

どちらも少年らの通うこの学校と自宅までの帰り道にあり、若くして一人暮らしをする少年は、毎日必ずどちらかを利用しているの

だった。

それをよく知っている少女は、朝刊に入っていたチラシを広げて、
『へさき〜』

『じゃあオレ、クドー行くわ。じゃあな』

そそくさと帰ろうとする少年の鞆の肩ヒモを掴んで、『ちょっと待ちなさいよ、私もクドー行く!』と駄々をこねた。

『何だよ!』

『 さん買い物テク教えてもらったから、マコトにもって思ったのに…』

『余計なお世話だ。オレにはオレの買い物の仕方ってのがあんだよ』

少女は悲しそうに口を閉ざした。

マズったか。泣くのか、今ので泣かせてしまったのか…?

『最近のマコト、付き合いが悪くなったって、みんな言ってるよ』

『………』

『マコトは、独りじゃないよ』

『………』

『勝手に孤立していかないでよ』

彼女はこうも言った。

『ちゃんと私達は、マコトのこと、解ってるから…』

少年が何も言えずに立ち尽くす様子を、早河誠はぼんやり眺めていた。

少女の顔の鼻から上が、何故か霞んで見えなかった。

彼女の名前が思い出せない。
おそらく、きっと大切なはずの、彼女の名前を——

＊ ＊ ＊

「オイ、この野郎。起きろ」

それは、少年——早河誠ならずとも最悪の寝覚めだったろう。ベッドで熟睡していた彼は、掛け布団を引っぺがされて胸倉を取られたのだ。

「よお、マコト・サガワ。昨日はよくもやってくれやがったな」

それも最悪の相手——テロリストのリーダーに。

「あ、アナタは!!」

目の前に見覚えのある銀髪と三白眼があって、誠はすぐさま彼の腕を振り払ってベッドから逃げようとした。

しかし、「何処行くんだよ」と腕を後ろに捻られ、うつ伏せに倒されてしまった。

「何するんですか！ 放してくださいよ、人殺し!!」

「記憶喪失のくせに、妄想力だけは一人前かよ」

「人を殺したじゃないですか！ 清芽先生や、あの研究員の女の人をっ！」

清芽も女性も、胸や腹を撃ち抜かれて殺された。この男が率いるという、テロリスト集団に。そして自らも、この男に酷い目に遭った。殺されそうになった。そんな男が、人殺しではなくて何だと言

うのだ。

そうして無理に腕を捻り返して、自由を得ようともかく少年を見かねて、「ケン、離してやれ」と誰かが命令した。

「肩を痛めてしまう」

「しょうがねえな」

ケンは手を離すと、医務室の扉付近まで下がった。よく見ると、彼の頭には包帯が巻かれている。昨日の彼には無かった物だ。

誰かが代わりに戦ってくれたのだろうか。

誠は未だに冴えない頭で、そんな的外れなことを考えていた。

「怪我は無さそうだな、少年」

ぬっと誠の視界を、丸坊主が埋め尽くした。「うあっ!？」と彼は思わず腰を抜かして、ベッドから転がり落ちた。

すると、「だ、大丈夫かい!？」すぐに介抱してくれた男は、誠が知る人物だった。

「清芽先生!？ 死んだんじゃないっ」

もう何が何だか分からなかった。幽霊かと思ったが、彼は日本の足でしっかりと地べたに立っている。それに、微笑にも生気が宿っていた。

「安心していいよ、マコトくん。アレは狂言だったんだよ。ホラ、エリくんも生きている」

清芽の手を借りて起き上がると、確かにあの女性研究員と同じ顔がそこに並んでいた。昨日の白衣とはまるで似ても似つかない格好

——迷彩服姿で、眼鏡も掛けていないが、昨日の美女と同一人物に
違いなかった。

「アロォー、マコトくーん。エリだよお、よろぺこ♪」

手を振ってウインクするエリに、「うっぜ」とケンは何打ちした。
それに腹が立ったのか、エリはどこから取り出したブブゼラー
——南アフリカの伝統的な楽器——を吹き鳴らした。その独特のけた
たましい旋律が、狭い室内を駆け巡った。

「やっ、止めろ！　るっせえっ！！」

ケンは耳を押さえて、涙目になりながら怒鳴った。

丸坊主の巨漢も渋面をたたえて、「俺からもお願いだ、勘弁して
くれ」

「ぶう」

エリは巨漢に言われると、渋々ブブゼラを手放した。しかしその
頃には、すでにブブゼラの姿は無い。今の一瞬でどこに仕舞ったの
か謎だった。

呆然としている誠に、巨漢は分厚い掌を差し出した。

誠は律儀にも、条件反射的にその手を握り返していた。丸坊主に
電灯の光が反射して眩しい。

「初めまして、早河誠くん。俺はコイツらのリーダー、酒顛ドウジ
と言う」

「リーダー…？　テロリストの…？　でも、アレ…、その人もリ
ーダーって言って……」

「だから違えんだよ。ありゃあ全部嘘だ。ったく、呑み込みの悪い

ガキだな」

ケンにはガラ悪く口を挟むと、また面倒臭そうに舌打ちした。
困惑して目を回す少年をよそに、酒顛は後ろで無言のままの黒人に言った。

「ウヌバ、お前も自己紹介を済ませておけ。Self-introductionだ」

酒顛を巨漢と形容するなら、ウヌバは巨人と言えるかもしれない。
二メートルを軽く越える高さから注がれる鋭い視線に、誠はゴクリと生唾を飲み下した。

「……………」

「……………何、です…か？」

「……………ウヌバだ」

いや、それは分かってるんだけど。酒顛って人が言ってたし…。
誠が挨拶に困っていると、酒顛がフォローしてきた。

「見てのとおりに、コイツはアフリカの少数民族の出身でな、日本語が堪能ではないんだ。理解してやってくれ」

「はぁ…」

確かに見た目はアフリカ系部族と言えるかもしれない。

酒顛のように坊主頭でありながら、何故か両のモミアゲと襟足の一部、そして短いポニーテールだけを伸ばして結っているという、一風どころか凄まじく変わったヘアスタイルをしているのだ。

今は無表情だが、怒らせると槍を持って襲ってきそうだと誠は思った。

それはさて置き、誠はとりあえず理解した体を装っておいた。今は少しでも早く事態を把握したい。説明を求めて、見るからに？年長者の顔？をしている自称リーダーに顔を向けた。

「老け顔とか思っちゃダメだよ？」

「お、思ってませんっ！」

「エリ、傷付くぞ」

酒顛は溜め息の後、本題に入った。

「さて、何から話そうか…。そうだ、キミから質問してくれ。できる限り答えよう」

「じゃ、じゃあ、アナタ達は何者なんですか？」

医者だと言ったり、研究員だと言ったり、果てはテロリストだ何だ…。彼らの正体は、結局のところ何なんだ。

「何者かと問われるのは当然だが、生憎と一言で語ることはできないのだ。少しこちらの事情に付き合ってもらおうぞ」

誠はここまで来たらままよという思いで、素直にうなずいた。

良い子だと内心思いつつ、酒顛は親切にもなるべく噛み砕いて話し始めた。

「世界には表と裏がある。しかし我々の意味するところのそれを、多くの人間は知らない」

表と裏。

それは一体であるが故に、互いの視線は交わらない、対極と呼べる存在。

「我々の言う？表の世界？とは、常任理事国が実質的に世界を統治している世界のことだ。いたって普通の世界——六十九億人あまりが生活している世界。キミが生活していた世界だ」

戸籍で管理された世界。

戸籍の無い人間も、しがらみによって国内で管理された世界。

国という巨大な単位で、血脈そのものを束縛された世界。

「対して、？裏の世界？とは、マフィアやテロリスト、政府や社会の暗部を意味するものではない。我々の言う裏とは、表に決して現れない、本来なら實在し得ない存在のことだ」

「實在、し得ない……？」

「我々はその、裏世界の人間だ。我々は表世界の現実を守る為に、自らの存在を表世界から抹消した。当然ことだが、生きる次元そのものは同じだ。しかし我々は、表世界の人々の目に触れないよう、努めて日々を過ごしている。我々は、彼らにとって、この世にはいないのだ」

戸籍が無いのは当然ながら、国というしがらみから解放され、裏という全く別の単位へ身を移した者達——それが彼ら、裏世界の住人達だ。

「表世界において、我々がこちらの都合で存在を知らせているのは、たったの数名。その中には政治の場において有力な権限を持つ人物が二人だけいる。アメリカ合衆国大統領と、国際連合事務総長だ」

それ以外は、我々に資金提供してくれる物好きな資産家達などだ。酒顛は肩をすくめる。狂っているだろと言いたげな顔をしている。

「彼らには我々を？ネイムレス？と呼ばせた。？知られざる存在？
ではなく、？匿名^{ネイムレス}を告げる者？とな」

「バランスを保つって言って、どうして知らせたんですか？」

「そうすることで、表世界の彼らは、裏世界の存在を知る。人は、未知に対して畏れを抱くものだ。そして人は、自分達を生物界の上位に立つ身だと考え違いをしている。だから我々は、彼らに告げるんだ。人では到底覆しえない力が、彼らの見えない場所で息衝いていることを。今ある世界を守りたいならば、自らの力で世界のバランスを保てと」

脅迫したと言ってもいい。

ネイムレスに属する巨漢は、不敵に笑った。

「表と裏が、互いにバランスを保つ努力をするってことですか…？」

「そうだ。努力を忘れた生物に待つのは——死、だけだ」

誠は怯えた目で、「も、目的は？　それが、目的ですか？」と訊いた。

酒顔はわずかに眉根を寄せて、真剣な目で答えた。

「世界の、ゆるやかな変化と、豊かな進歩」

「ゆるやか…豊か…」

「我々が裏の世界で生きているのには理由がある。我々は、一般人とは異なる力を持っているのだ」

曖昧模糊なフレーズに、「力…？」と誠は首をかしげた。

「そうだ。我々は、世間一般で言うところの、超能力者だ」

「……それ、本気ですか？」

いい歳した大人が大真面目な顔で言うので、誠は失礼だと思いな
がらも冷笑した。

しかしそれで酒顛と、彼の取り巻き達が怒ることはなかった。む
しろ逆に、信じない誠を嘲笑っているかのようだった。

「な、何ですか。普通に考えて、アナタ達の方が変じゃないですか
…!？」

「普通、か」

「そうですよ。常識的に考えれば、こんな科学の時代に超能力なん
て有り得ません」

マーベル・コミックの読みすぎだ！

そう罵ろうとすると、酒顛は豪快に笑った。

「ハッハッハッ、それはおかしい理屈だ。むしろ我々は、逆の考え
を持っているのだから」

「逆？」

「科学を生み出し、ただ単なる動物の枠から飛び出した人間だから
こそ、さらなる進化の余地があったのだと、我々は思うのだよ」

「……だからって、超能力なんて…」

「ウヌバ、見せてやれ」

ウヌバはノースリーブで剥き出しの太く逞しい右腕を、少年の目
の前にぐいと自慢するように見せた。そして開いた手に少しばかり
力を込めた。すると手首から先に、灼々とした真っ赤な炎が発生し
て、一息に腕にまとわりついた。

「うわっ!？」

「物は試しだ。この炎に触れてみる」

「えっ!？」

酒顛の指示で、ウヌバは炎の手を誠に向けた。彼の表情に苦痛は見えない。

「その猜疑心を、自分で払ってみてくれ」

凄まじい熱放射だ。火の粉が散っていて、鼻先が軽く炙られているようだ。

しかし誠は何かのトリックで、タネは必ずあると信じて手を伸ばした。

が、「あつつつ、あつつうううっ！！ 熱いですよっ、本物ですよコレ！！」

調子に乗りすぎた。焚き火の炎と同じ、触れば火傷してしまう、あの炎だ。

誠のリアクションに一同は大笑いした。

ケンだけはムスツとしているが、彼らは悪い人ではないのかもしれないと、誠は多少気を許してしまっていた。

「そりゃそうだ。これはウヌバが生み出した、本物の炎だからな」

ウヌバは事が済んだと察して炎を消すが、まるでよくできた手品のように皮膚は全く爛れていない。黒人特有の掌と甲との色味がハッキリと分かれた、綺麗な手のままだ。

清芽が用意してくれたステンレスの器に入った氷水で、手を冷やしつつ、「本当に、超能力者なんですか…？」と誠は質問を重ねた。

ESP ミュタント
「超能力者、突然変異体…、様々に言われるが、我々はそういった公的な類ではない。裏世界で生きる我々は、表世界にとって異端的な存在でなくてはならない。故に我々は、我々のような者達を便宜的に、ヘレティック異端者と呼ぶ」

「変人っていう奴ね」

エリは自虐的に言うが、まるで呑気な顔をたたえている。事実そうであるから否定のしようがないといった具合だ。

「じゃあ、皆さんもその、ヘレティックなんですか」

「そうだ。我々はそれぞれ固有の能力——センスを持っている」

ヘレティックの使う常識離れの力を、センスと呼ぶ。ケンの異常な嗅覚や聴覚、エリの赤外線を感知する特異な知覚、ウヌバの発火能力——どれもがセンスである。

「我々はこの力を正しく行使し、世界の急速な発展を阻止している」
「どういうことです？」

「ヘレティックには当然、頭脳が異様に発達している者もいる。彼らは時として、想像を絶する殺戮兵器を発明してしまうことがある。科学にせよ、薬学にせよ、発明や発見とは、ともすれば人類の生活に繁栄を齎す場合もあるが、失敗によるリスクは付き物だ。それが兵器ともなれば、一度の試験運用におけるリスクはあまりにも高過ぎる」

兵器は開発から無数の実験を経て、はじめて実戦投入される。成功すればその価値を認められ、そこで得たデータから毒気を抜いて応用することで、新たな技術として社会の糧になる。原子力が、その一例である。

逆もまた然りだ。

しかしその影には必ず犠牲者が生まれる。

もしも人知を超えた発明があれば、もしもその開発者がヘレティックであるなら、もしも人殺しを前提、あるいはすでに利用された可能性があるならば——酒顛達はそれを黙認するわけにはいかない。

一国がその利権を獲得した瞬間、世界はまた、大きな戦争の火蓋を切ることになるからだ。

「ヘレティックが開発した物は、どれもが常識外れ——つまり、オーバーテクノロジーというやつだ。それが強力な兵器で、万一使われでもしたら、世界のバランスは一挙に崩れて、人類の存亡自体が危うくなる。我々はそれを表世界の誰よりも早く察知して、未然に防いでいるのだ」

「そんなことを……何で……？」

「決まっている。？世界の為？——だ」

「だけど、ボクは一般人ですよ？」

「残念だが、キミは一般人ノーマルではない。キミも、異能なるセンスを持つ、異端者ヘレティックだ」

「そんな……。そんなこと、あるわけないじゃないですか……」

「俺をこんなにしたのは、テメーなんだぜ」

ケン は頭の包帯を親指で指した。

「ちょっと待ってくださいよ、ボクは何も知りません！」

彼に怪我をさせた覚えは無い。むしろ痛めつけられていたのはこっちだ。

誠は声を荒げた。

「ボクは……、ボクは何者なんですか!？」

酒顛は書類を差し出した。そこに挟まれていた写真には、都立高校の制服を着た誠の姿が写っている。一同の目が、一斉に酒顛へ向けられる。

「この組織のボスが許可した。キミにも知る権利くらいはあるらしい」

誠は恐る恐る書類に手を伸ばした。

いくら捲つても頭に内容が入ってこない。ただの文字の羅列で、記憶に無いことばかりだった。

「キミは東京で生まれ、五歳までそこで暮らしたが、父親の仕事の関係で中学三年生まで大阪で生活していた。しかしあることが原因で、東京へ戻ることになった」

「…え？」

「御両親が、海外旅行中に行方不明になられたからだ」
「行方…!？」

彼に兄弟はいない。早河家は元々兄弟が少なく、短命な家系のようで、伯父や伯母、従兄弟すらいなかった。

「その後キミは、父方の祖母のいる東京の実家に引き取られた」

母親は両親を早くに病気で亡くし、引き取り手が現れなかった為に児童養護施設で育った。

父親は母子家庭で育ち、食費から学費まで二人で協力しながらやりくりしていた苦労人だった。

「だが、その祖母もまもなく――」

「デタラメだっ!!」

書面にある祖母の名前と享年が目に入るや、誠は叫んでいた。それに苛立ったケンが、「テメーが知りたいつつつたんだろうがよ!」と再び胸倉を掴みにやってきた。

「ボクはっ、ボクは…っ!？」

知らない。こんなの知らない。

でも、確かにおかしいと思った。

病院で目を覚ました日からおかしいと思っていた。

ナースが御両親に連絡をと言った時、医師は彼女を止めてひそひそと耳打ち合っていた。

そういうことか。いないから配慮されたのか。

顔も名前も思い出せない親という存在さえも、隠されていたというわけか。

これじゃあ完全に、孤独じゃないか。

「早河誠くん。キミがヘレティックであると判明した以上、我々と敵対している連中は必ずキミを拉致しに来る。ターゲットはキミ一人じゃない、我々もその対象だ。奴らは無抵抗を示さない我々を殺すか、薬漬けにして廃人になるまで扱き使うか、どちらかしかない」

誠はベッドの上で、耳を塞いで身を縮めた。嗚咽が広がって、シートが濡れていく。

その様子にエリは居た堪れなくなつて、「リーダー。頭ごなしに言っても、彼を追い詰めるだけですよ。しばらく彼の自由にできませんか？」

「それもそうだな。彼のことは俺に一任されているし、問題無いだろう」

「マコトくん。部屋のカギは開けておく。外へ出るのはキミの自由だ。食事も適当に用意させる。もしも困ったことがあれば、コレでコールしてくれ」

清芽はベッドに備え付けられたコンソールの、緑色のスイッチを指差した。

誠は一瞥もせずに、膝に顔を埋めるばかりだった。

清芽はベッド周りのコントラクトカーテンを閉めると、酒顛達と一緒に部屋を出た。

誠は、自分が何故泣いているのかも解らなかった。
解らないことにまた、泣き続けた。

＊ ＊ ＊

ネイムレスと呼ばれる者達が隠れ住む施設は、世界中に点在している。彼ら自身はそこを家や基地ホームベースと呼び、特に酒顛達がいるこの基地を本部HQと呼んでいる。

ここ本部はマリアナ海溝近郊にあり、海洋プレートに張り付く岩盤に擬態している。

内部は近未来的な造りになっており、中央部分では住居や研究室などが軒を連ねている。長い通路を挟んだ反対側は、ほぼ全面ガラス張りになっており、天然のアクアリウムと化している。

あくまで深海にある為、基地内部の光源は、海水から分離させた重水素をエネルギー源にした、熱核融合炉による自家発電形式となっている。海上の現在地と同じ昼夜の明かりを再現し、生活リズムを狂わせない仕組みを取っているなどの手の込みようだ。

その為かは定かではないが、このアクアリウムに紛れ込んだ深海魚は、光という未知の現象を肌で感じ、独自の進化を遂げているのだった。

まるで、この基地に住まう人々のように。

「惨いものだな」

通路で、酒顛はそうこぼした。

すぐその海から厚いガラスを越えて、いつになくどんよりとした湿り気が伝わってきていた。

「たとえば記憶があつたとしても、急にこんな話を突きつけられれば混乱してしまうのは無理もない。しかし彼には記憶が無く、過去の自分さえも知らない。交友関係も分からず、両親の顔さえも憶えていない。一般常識だけが、彼を支えている…」

「全生活史健忘と言うんだ。外傷性の、部分健忘だ」

酒顛チームと並んで歩く清芽が答えた。

それにエリが問う。

「つまり、憶えていることと憶えていないことがあるってことですか？」

「そうだね。酒顛くんの言うとおり、彼は一般常識を憶えている。思い出せないのは、自分と密接に関わることだけだ。生後からの生活や近い人のことを、彼は思い出せないでいる」

「外傷性って言いますが、アイツ、怪我なんかしてねえッスよ」

ケンはある自分の頭を指して、こんな風になってたら分かるけどな、という顔をした。

「担当医のカルテによれば、確かに頭部への外傷は見られない。しかし彼の脳の一部——記憶野の付近に、小さい傷が修復された痕がいくつも残っていた」

「よく分かりますね、いつものことですけど」

「ハハハ。《体内透視》のお蔭だね。おそらく事故に遭った当時は、深い傷が残っていたんだろうが、今となっては確かめようもない」

当然のことではあるが、清芽もヘレティックだ。

彼はレントゲンやエコー検査よりも精確に、相手の体内を見通す透視能力を持っている。それに相俟って、ヘレティックならではの優れた身体能力からなる高い技術力を有するので、彼に医療ミスという言葉は無縁だった。

故に人は、彼を神と崇め、尊敬してやまない。

「傷が治っても、記憶は戻らないんですか？」

「別個の問題だね。脳内の電気回路が正常値に戻らない限りは、難しいと思うよ。今の彼の脳は、宝箱のように固く閉じられているんだ」

「……あの子、可哀想ですね」

「そうだね。僕も、そう思うよ」

「エリ。そう思うのなら、強要はするなよ。腫れ物のように、デリケートに扱ってやるんだ」

釘を刺す酒顛に、「腫れ物ですか」とエリは怪訝な顔で訊いた。

「彼の精神が潰れた時に吹き出るものは計り知れん。何せ、彼のセンスは——」

ゴッ！！

反動の大きさ、彼が暴走した時の被害規模を考慮した酒顛のセリフは、鈍い音で打ち消された。後ろを振り返ると、顔を俯けたケンが壁を殴って大きなヒビを入れていた。

「アレは、《韋駄天》なんかじゃねえ……！」

そう吐き捨てる彼に、エリは首をかしげた。

「何言ってるんの。実際に目の当たりにしてきたリーダーと清芽先生が言ってるんだから、それ以外に無いでしょう？」

昨日誠は、秘められた力——センスを発動した。

個々に違った特徴を持つというそれだが、彼のものはすでに《韋駄天》という名を付けられたものだった。まさに神速と呼ぶべき、残像も残さぬスピードは、酒顛も清芽も、過去に幾度も間近で見たものだった。

それももう、二十余年も前になる。

「《韋駄天》は音速を超えんだろ？ だけどアイツが消えて、俺の背後を取るまでには一秒はかかってやがった。アレは——劣化品だ」

歩き去ろうとするケンの背中が、亡き人のそれと重なって見え、
またもや図らずも酒顛は口を開いていた。

「結論を出すのは早いぞ。セイギさんは《韋駄天》を扱いきる為に、
肉体を極限にまで鍛え抜いていた。マコトくんも志を持ち、努力さえすれば、きっと——」

「今のアイツを見ただろ。自分のことで精一杯の奴が、世界の為に
何ができるんだ……！」

不愉快な感情が後頭部の傷口を疼かせる。

ケンはギリッと歯軋りを立てた。

〔二〕（後書き）

どうも、T・Fです。

ということ、主人公の名前は「早河誠」です。

そして彼の能力は、『韋駄天』——超高速の脚力ということでした。こういった作品は、今まで世界各地で展開されてきました。

日本では勿論、作中にもアメコミの金字塔マーベル・コミックの名を出しましたが、この【ネイムレス】は私なりの解釈で超能力というものを綴っていただきたいと思います。

既出のストーリー展開となってしまう虞があつて非常に怖いのですが、まあ、そこは——ね、何とか適当に凌いでいきたいですよねw

さてさて、それでは来週にまた投稿させて頂きます。

本日も御一読頂きましてありがとうございます。

お疲れ様です。

T・Fでした。

〔二〕（前書き）

二話目です。

あらすじを少し。

2012年 某月。

とある出来事で記憶を失った少年――早河誠は、入院中に謎の部隊によって、彼らの秘密基地へと拉致された。

誠は、部隊の紅一点であるエリ・シーグル・アタミの計略によって、基地内で起こる偽テロ騒動に巻き込まれる。

追いつめられた誠は、テロの主犯を名乗る雪町ケンとの挑発と、精神的な逼迫の末、人知を超えた力を発現する。

格闘の末に気絶し、次に目を覚ました誠の前に現れたのは、ネイムレスと組織外の人間に呼ばせている謎の組織の構成員達だった。

部隊のリーダーを名乗る酒顛ドウジは、誠も自分達同様に異端者ヘレティックと呼ばれる超能力者であると断ずる。

困惑する彼は、その事実から逃げるように、ただただ泣きじゃくるのだった。

〔二〕

荒唐無稽で途方途轍もない話を聞かされて、さらに一日が過ぎた。
ネームレス無名組織やら異端者ヘレティックやらと呼ばれる者達が住まう海底基地に連れ込まれて三日目になる。

早河誠は、昨夜は一睡もできなかった。布団に包まって、夜通し暗涙で枕を濡らしていた。

何故こうなってしまったんだ。

ヘレティックとは何だ。

センスとは、表だとか裏だとか…。

いくら考えても、最終的には自分にもいたという家族のことに行き着いてしまって、また悲しくなってしまうた。

「ボクはこれから、どうなるんだ…？？」

ダンゴムシのように膝を抱えて丸まっていると、また涙がこぼれた。

そこへ、自動ドアがスライドする音が聞こえた。

誠はビクンと身体を強張らせながら、薄く開いていた目蓋を固く閉じて、アゴを心持ち引いた。

誰だ、清芽先生かと思っていると、「マコトくん、外に出ない？」

エリ・シーグル・アタミという女の人の優しい声だった。

今のをノック代わりにコントラクトカーテンが開かれた。ギイと鳴ったので、椅子に座ったのが分かる。

誠の動悸が急激に速まり、多少の怯えがあって汗ばんだ。

返事がないことに焦れたのか、エリは誠の頭の位置を把握して、耳元でそっと囁いた。

「そんな風に狸寝入りされたら、お姉さん…」

彼女の目は熱源を精確に捉える。目を閉じて意識を凝らせば、壁を越えた先の一定距離まで熱量を感知できる。だから、生物がいくら隠れたところで見逃すことはない。

エリは細い指をスツと布団の中に忍ばせて、いやに扇情的な手つきで彼の足を撫でた。

誠はギョツとなって、「うわっ、やめてくださいっ!!」掛け布団と一緒に飛び上がった。

「傷付くなあゝ。そんなに驚かなくてもいいのにー」

「だ、だって、いきなり触るから!」

「アハ、純情なんだあゝ」

挑発するような目でエリは笑った。

それにムツとした誠は、「何しにきたんですか。早く僕を、元の場所に返してください」

「それはできないよ」

「どうしてですか」

「殺されちゃうから」

誠は苦笑しながら、「ま、またそうやって脅すんですか」

どうしてこの人達は、こうも簡単に物騒な言葉を並べ立てられるのだろうか。

エリの平然とした顔が逆に恐ろしい。

「嘘じゃないよ。こういう生活をしていると、嫌でもそういう光景を目の当たりにするの」

「嘘ですよ。ボクを言いくるめたいから、ありもしないことをでっち上げてるんでしょ」

「嘘じゃないって。今も世界中で、普通じゃないという理由だけで生き死にの選択権を他人に奪われてる人がいる。嘘だと思うなら、キミをこれからあの病院に返してみようか？」

きっと昨日とは比べ物にならない苦痛が、キミに襲いかかるよ。
彼女の目に影が差す。

誠は背筋を粟立たせたが、「願ったりですよ……！」と啖呵を切ってみせた。想像以上に頭のおかしい人達に誘拐されたに違いない、彼はそう思っていた。

「私達の存在を公にするつもり？ 誰も信じないのに？」
「それでも……」

「無理よ。誰も信じない。信じるのは？——国境なき反乱者《Rebel without borders》——^{ループス}REWS？と私達が呼称している敵対組織だけ。キミは自分で自分の価値を、声を大にして知らせるだけになるわ。自分で自分を追い詰めて、殺すことになるのよ」

「じゃあ、ボクはどうすればいいんですか!？」

誠は自分の感情を制御できなかった。尖った声で、不安な気持ちを吐き捨てた。

「こんなワケの分からない人達のいる場所に勝手に連れ込まれたボクは、一体何をさせられないといけないんですか！ 過去も未来も今の自分さえ分からないボクは、何を信じていけばいいんですか！
！ こんなのっ、あんまりだ……っ!!」

エリはそっと彼の頬に手を伸ばした。涙を拭ってやる為のそれも、人間不信の子猫のように払い除けられてしまった。

ベッドから逃げ降りた彼は、壁に背中を張りつけて、肩で息をし

ながら彼女を睨み続けた。

気を取り直して、エリは彼の目を見て告げた。

「私達は私達で、キミの命を守らないといけない。その為にはまず、キミの協力が必要な。だからキミにも、色々知ってほしいの」

「…何を」

「まずは、ヘレティックとしての自覚を持ってほしい」

「そんなのできるわけないでしょっ、ボクは火を出したりできないんですから!」

あんなの私だってできないわよ! とエリも言い返したかったが、話がこじれそうになったので呑み込んだ。代わりに、「記憶、取り戻したくないの?」

「どうしてそういう話になるんですか。論理のすり替え…、いや、やっぱりただの脅迫じゃないですか!」

「今、目の前にある現実を受け止められないで、どうして自分の記憶を取り戻せるの?」

「順番なんて関係ありませんよ! アナタ達はそうやって適当にボクを言いくるめて、手籠めにしようとしてるだけでしょ!??」

うゝ。

エリは下唇をつき出して、不服そうな顔をした。これではいつまで経っても平行線を行くばかりだ。

「そんなカワイイ顔して、意外と頑固なんだ」

「カ、カワ…!??」

顔を赤らめて動揺する誠に、エリは言った。

「とにかくさあ、歩み寄ろうよ。基本私、ケンと違って喧嘩とか嫌いだし。陰悪な雰囲気とかって耐えられないんだよね」

誠は俯いた。未だに納得できていない様子だったが、「ボクだって、そうですよ…」

素直な子、と安堵したエリは訊いた。

「表世界の人には、自由が約束されてるんだってね。世界人権宣言の、？基本的人権の尊重？ってやつで」

「え」

「でもね、私達ヘレティックにはそれが無いの。常に何かしらの圧力で縛られてる。自由を主張しても、誰も認めてくれない。その名の通り、異端者だから」

「それは、アナタ達が勝手に、裏世界の人間になったからでしょう」

「そういう意味じゃなくてね、普通じゃない人間っていうのは、人間として認められないのよ。まるで条文に書き加えられているようにね、私達には人権が適用されないの」

エリは手の平に目を落とした。

かつての感触を懐かしむように開いては閉じ、唐突に語り始めた。

「ある人は昔、キミのように表世界で生きていたんだけど、人権が認められていなかった。その人は物心つく前に親に捨てられ、南米のカトリック教会の周辺を集団でうろついていた、ストリート・チルドレンの一人だった」

ストリート・チルドレンとは、身寄りも財産もないので路上生活を強いられている子供達のことだ。

誠もその程度の知識は漠然と憶えているが、その苛酷過ぎる生活を軽々しく想像することはできなかった。

「当時十歳だったその人は、同じ境遇を持つ子供達と一緒に、危険なことを数多くしてきた。窃盗や強盗はもちろん、無邪気な背格好を悪い大人にお金で買われて、麻薬の運び屋や違法とされている売春広告を常連客に売りつけたりして生計を立てていた。全ては生きる為。それ以外の思考は、一つも無かった」

善悪を割り切るほどの経験も無かった。それ以外のことをして生きる方法を知らなかった。

綺麗な服を着て歩く人達は、自分とは違う生物だと本気で思っていた。

「その人には特殊な力があつた。特に夜間になると有効に発揮できるその力は、仲間の助けになった。その人は仲間の中でも特に幼かったから、誰よりも可愛がられていた。でも、それは嫉妬を生んだ。さらには、偶然が重なった」

南半球の七月——冬が訪れ、寒さ厳しい日々の中だった。

「無政府で暗躍する男達が、教会の近辺でヘレティックを探し回っていたの。彼らは世界中のありとあらゆる場所で、血眼になって対象者を探していた。時には子供に、面白いことや変なことができる人を知らないかと問いかけるの。それにある少女は、仲間の中に一人いると告白した。仲間内で他言無用・秘密厳守とされていたのに、その少女は嫉妬の為に暴露してしまった」

その地域には？一死の部隊《Death Squads》？という白色テログループが存在する。

彼らは地域の安寧を求めて、悪行を繰り返すストリート・チルドレンに、暴行や殺害で怒りを示す。？死の部隊？を雇うのは、被害

に遭った店の主人や、そこを統治する政治家。雇われるのは警察官や職にあぶれた民間人だ。

彼らは、子供達にも等しく命があるということを見捨て、ことある毎に集団殺戮^{ジェノサイド}を決行していた。補導だ何だと御題目を並べるが、結局はみすばらしい上に始末に負えない彼らが目障りなだけなのだ。そして、その矛先がついに、？十歳の少女？がいるグループにも向けられた…。

「偶然はさらに続いたわ。ある仲間が悪辣な警官達に怒りを覚えて、パトカーに石を投げたの。それが引き金になって、深夜、？死の部隊？が動いた。数十名いた子供達が車に取り囲まれて発砲された。？私？は一人、仲間に逃がされて、脇目も振らずに裏道を逃げた。そこへ彼らが現れた。部隊に紛れて、ヘレティックを探していた男達が、？私？の前に立ち塞がった」

男達の顔は暗がりで見えなかったが、服装は当時流行っていたラフな格好だった。

その時のエリは、間違いなく部隊に参加した、金に汚い大人達だと思っていた。

そんな男達は、口々に言った。

？動くなよ、お嬢ちゃん？

？熱を目視できる能力か。面白い…？

「私は腰を抜かした。起きない身体で必死に後ずさった。でも、真後ろにいた少女に突き飛ばされてしまった。リークした少女だった。彼女は、私のことが腹立たしいと言ったわ。気持ち悪い、自分達以下の一糞にも劣る存在だと罵ってきた……」

？アンタは悪魔よ。アタシ達が不幸なのは、みんなみんなアンタの

せいなのよ!?

エリの額に人差し指をぐいぐい押し付けてなじった。長い爪が刺さって、血が滴った。

「別にそれには何も感じなかった。悲しかったのは、裏切られたことだった。信じていたのに、仲間を窮地から救う為に神が与えてくれた、ささやかなプレゼントだと思っていたのに、この力のせいで妬まれていた。私はこの子に売られたんだ、そう思った」

「何でみんな恐れないのよ。こんな奴、普通じゃないって分かっているはずなのに。でも、アハハ、アンタみたいな悪魔憑きの連中は、この人達の商売道具になってればいいのよ!？」

「肩を落とす私を、少女は嘲笑ったわ。でもそれも次第に落ち着いて、これを機に今後は粹がらないようにと忠告すると、男達に後は勝手にしてと言い残して去って行こうとした。そこへ男が微塵の躊躇いもなく、彼女を背後から槍のように長い指で串刺しにしたわ」

「小娘、貴様に何が分かる…!？」

「おい、勝手な真似をするな!？」

「俺達は好きでこんな身体に生まれたわけじゃない!! 普通の貴様に何が分かるっ!!!？」

怒る男もヘレティックだった。表世界での人目も憚らない生活に憧れ、現実には裏世界での息苦しい生活を強いられる異端者の一人だった。

指を鋼鉄の鉤爪のようにできるセンスだった。

「それで一般人に八つ当たりってか? 虫唾が走るぜ?」

？そのヒステリーな思考回路、同属の我々にも理解し難いな！？

「銀髪が目つきの悪い子と、丸坊主の老けた顔をした青年。突然現れた彼らは、私の仲間じゃなかった。けれど彼らは不思議な力を使って、あつという間に男達を倒してくれた」

あの日、冷たい目をした少年が差し伸べてくれた手の温もりを、エリは忘れられない。

「仲間のもとへ戻ると、死人が出ていた。大勢殺されていて、血の海が広がっていた。私を逃がしてくれた子も、微かな体温を残して動かなくなっていた」

灰雪が降っていた。ひらひらと降りてくるそれは、彼らを慰めるように血を覆っていた。

少年達は男達の遺体を回収すると、たどたどしい現地の言葉でエリに同意を求めてきた。

自分達と共に、ある場所で暮らしてほしいということだった。共に来ても平穩無事を約束できるわけではないが、ここに残っても同じ目に遭うだけだと言われた。

返事に迷っていると、彼らは条件を出してきた。

生き残っている子供達は、自分達の協力者が責任を持って保護すると。

それならと、エリは彼らと共に行くことを選んだ。

シンパシー
共感も抱いていた。それに自分のように特殊な人間が傍にいれば、少女の言ったとおり、様々な不幸を周りに及ぼしかねないと思った。

「不幸の上に、不幸を塗り重ねるわけにはいかない。そう考えたから、私は今、ここにいます」

「どうして…そんな話を……？」

「公平^{イーブン}じゃないと思ったの。キミだけ勝手に個人情報調べられて、可哀想だと思った」

「結局、あの人は人を殺したんですね。それで世界の為にやっているとか言って、偽善だとは思わなかったんですか？」

「私は自ら志願して、この組織の兵士になった。ここで非戦闘員として安穩と過ごすこともできたけれど、私と同じ境遇の子や、ストリート・チルドレン達が今も苦しんでいるかと思うと、いても立ってもいられなかった。思い描いた未来を実現させるには、目先のことから手を出して広げていかないとダメだと思ったの」

自分も、世界を影から支える力になれる。より良い世界を生み出す力に…。

彼女の目には確かな強さがあつた。固く、清廉な意志だ。

「マコトくんは今、例外的に自由を認められている。それは行使しても怒られないし、損することもない。誰にも迷惑をかけないのなら、尚更」

エリは微笑んで、誠の手を引いた。

「ちょっとだけ、デートしよっか」

＊ ＊ ＊

無粋な輩が三人いる。

彼らは通路の脇に隠れて、歳の離れた姉弟のように手をつなぐ少年と美女の後ろ姿を尾行していた。

「ケン、何故ソワソワしてル？」

片や楽しそうに、片や恥じらいながら微笑み合う二人を、普段と違った様子で見守っている雪町ケンに、ウヌバは純粋な気持ちで訊いた。

返ってきたセリフはいつものように口悪い、「し、してねえよ。黙ってろよコノヤロー、バカヤロー…」しかしどこか覇気が足りない。気も漫ろである。

そんな彼らを率いるチームリーダーの酒顛ドウジも、アゴに手をやりながら難しい顔をしている。

「分かるぞ、ケン。俺も少し落ち着かないんだよなあ。エリは娘みたいなもんだからなく」

「一緒にすんじゃねえよ、ハゲ。俺はあのガキが妙な気を起こさねえか見張ってるだけだ」

「妙な気ってお前…、チューか？ 手つなぎは良くても、チューは認めないってか!？」

「は!？ そ、そんなんじゃないし、意味分かんねえっ!」

グハハハと高らかに笑う酒顛に、ケンは顔を真っ赤にして怒った。酒顛はここぞとばかりにからかおうとしたが、「チューって何ダ。接吻のことカ？」ウヌバは首をかしげた。

「何で難しい熟語の方で覚えてんだよ」

「聖書に載ってタ」

そう言って胸元から取り出したのは、分厚い大型の国語辞典だった。

「「そう、良かったな…」」

強面の顔の中で純朴な瞳をキラキラと輝かせている彼に、二人は

如才ない笑みを返した。

「もしかして、緊張してるのかな？」

ウブな少年の心拍が高鳴っているのを見抜きながら、エリは白々しく問いかけた。

誠は口元をモゴモゴさせると、何も言わずにまた黙った。

「ん〜もお〜♪ カワイイなあ、マコっちゃんはーっ！」

「マ、マコ…!？」

「ダメ？ キミのあだ名なんだけど」

「い、いえ…、何か、嬉しい…感じですよ……」

誠は赤らんだ頬を掻いて俯いた。

「グ○シって感じ？」

中指と小指を折って、免許皆伝な感じで見せつけてきた。

誠は驚きと同時にどこか冷めた気分になって、「…何かよく分かりませんが、これに関しては、そうですねって言ったらダメな気がします」

赤と白のボーダーカラーが迫ってきそうで怖かった。

「お堅いなあー♪」

ニコニコしている彼女に、誠は訊いてみた。

「あの、ア、アタミさん…」

すると、「そんな他人行儀な呼び方はメっ！ エリって呼んで？」と彼女は幼児を窘めるように言って、ウインクした。

「じゃあ、エリ…さん」

さすがに呼び捨てはできない。

誠がチラチラと彼女の顔色を窺いながら口にする、 「なあに、マコちゃん？」と優しい顔で返してくれた。

やはり、良い人なのだろうか…？

「えっと、ヘレティックって、何なんですか？ ボクも、その一員なんですよ」

「そうね。有体に言えば、一般の人達に大きな＋Xが付帯された人々、かな」

「エックス？」

「＋αって和製の外来語なんだよ？ 英語では＋X、もしくはプラスサムシング」

「初耳です…」

「αってXに似てるでしょ？ だから間違えたんだよ。あ、Xっていうのはつまり、未知数のことね」

「それは分かります。学校で習った——ような気がします」

「自信が無いの？」

「はい…」

「疑い過ぎない方が良いと思うよ」とエリは言った。「マコくんは、常識だけはちゃんと覚えているんだから、知識に関しては自身を持って良いんだよ」

「でも、確証がありませんよ」

「そんなもの、誰だってそうよ。昔のことを逐一覚えている人なん

て、そうそういないんだから。それこそ、ヘレティックでもない限りね」

「……………」

「大丈夫だよ。もしも知らないことがあっても、それは本当に知らなかったことかもしれないだし、もしも間違ってしまったって、人はみんな間違うんだから」

「そういうものですか」

「そういうものよ。もしも間違っただとしても、思い悩む必要はないわ。だって、生きている内は、いつだって間違いに気付いたら、それを正すことができるんだから」

キミが知っている常識は、キミの中にちゃんとあるんだよ。

エリはそう優しく告げると、「それじゃあ、ヘレティックの話ね」と横道に逸れてしまった話を軌道修正した。

「センスっていう、特殊な才能を持つ人々をヘレティックって言うんだけど、そのヘレティックについては、まだ分からないことが多いの」

「センス…って、昨日のアフリカ人の方がやったような…？」

「ウヌバね。名前、ちゃんと覚えてあげてね」

ウヌバは右手から炎は出していた。油まみれの手にライターで着火させたわけでもなく、ただ少し力を入れるだけという、確固たる自分の意思で炎を生んでいた。

「彼は中でもさらに特殊かな。私は目とかがね、普通じゃないらしいの。私、赤外線を目視できたり、目の届かない遠くの熱量を把握したりできるの。だから私にとって赤外線って、可視光線なんだよね」

しかし開眼時は？目を凝らす？、閉眼時は？意識を集中する？という付帯条件が伴う。

「昨日もリーダーが話に出していたけど、ヘレティックの中にはすつごく賢い人がいるんだけど、その人達にも私達の出生の謎が解明できていないらしいのよね」

「そうなんですか」

「この基地にいるメギイドっていう博士が、ヘレティック研究の第一人者なんだけど、その人でも私達の誕生の全容は解らないみたい。賢いって言っても、その人に見合った分野でなければ存分に力を発揮できないみたいだし」

「ん？ヘレティックの研究は、その人の専門じゃないんですか？」
「専門は専門だよ。でも、どっちがより得意かって言えば、技術開発なんじゃないかな」

「よく分からないですけど、ノーベル賞クラスの人が世界には大勢いるってことですか？」

「そうだね。でも、そのほとんどの科学者が、世間から認められずに生きてきたの。話が突飛し過ぎちゃってね、本当の変人扱いされてきたって聞くよ。不遇よね」

「：何だか、可哀想ですね。正しいことを、言っているはずなのに」
「正しさの証明は、難しいんだよ。特に、少数派にとってそれは至難の業」

「少数派：」

「うん。ヘレティックとして覚醒した人類は、およそ一万人とわわれているわ。その内の三割が私達ネイムレスという組織の一員よ。単純計算で七十万分の一だから、間違いなく少数派よね」

「難しいんですね」

「じゃあ、なるべく分かりやすく、ヘレティックについて教えるね」

誠がうなずくのを確認してから、エリは続けた。

「私達は突然変異で生まれてきて、覚醒因子という特有の遺伝子を染色体の中に含んでるの。だけど、それくらいしか解らない。肝心な、どうしてそれを持っているのか、どこが起源^{ルーツ}なのかが判明していないの」

突然変異でも、同様の事例が多数ある為に、何らかの特定の要因があるのではないかという研究が、今も尚続けられているという。

「覚醒因子？」

「私やケンなんかは、生まれつきそれが機能している先天発現型って言われてるタイプなんだけど、それとは別に、これまで一般人だった人が突然ヘレティックになってしまう後天発現型というタイプがあるの。キミは、それ。キミを保護した時には存在しなかった覚醒因子が、今ではちゃんと染色体の中に確認されている」

組織の医師――清芽ミノルは、先日のケンとの戦闘時に誠が負った傷から、血液を採取していた。それをメギイド博士と共に解析し、覚醒因子の遺伝子発現を認めた。

「実はね、キミをここに連れてきた初日、眠ってる間に、ある薬を注射させてもらったの」

「：今、とんでもないこと言いませんでした？」

誠は哑然となった。

薬漬けがどーのこーのと言っていたのはどこの誰だったか…。

「アハハ♪ だから、ゴメンね。その薬ってのは、覚醒助長薬って言うんだけど、覚醒を強制的に早める薬なの」

「ど、どうしてそんなことを」

「キミにセンスがあるのかを知りたかったから。覚醒因子は、体内で分泌されるアドレナリンと一緒に活発になる性質を持ってるから、ランニングマシーンで走ってもらったり、テロに見せかけて緊迫感や生き死にの境を体感してもらったの。助長薬は人体には無害だから、もしもアドレナリンの上昇に連鎖反応を示さなくても、別に問題は無かった」

「大有りですよ！」

いきなり怒鳴る彼を疎ましく思いながら、「無いわよ」とエリは断言し、「キミはちよつとした白昼夢を見ただけ。東京の病院には夢遊病がすぎて外出してたつてことで済ますつもりだったから」と悪びれもせずに、ずいぶんと肝の据わった態度を見せた。

「それで誰が納得するんですか!？」

「納得せざるを得ないわよ。だって、キミが無事なら良かったって落着するんだから」

「メチャクチャだよ……」

「一昨日は、キミも私達の存在を全く知らなかったわけだしね。キミがいくら騒いだとしても、記憶喪失による軽度の錯乱状態ってことでハイ終了。粹な計らいとして、入院費や今後の治療費なんかを全額肩代わりするってのも考えてたんだよ」

「やっぱ、メチャクチャじゃないですか……」

「そうかもね。でも、そうまでしても、私達は私達の道理で、事を成すしかないの」

誠は彼女から手を離すと、八の字を寄せて、「?世界の為?——ですか?」

「そうよ」

エリの即答に、誠は愚痴るようにつぶやいた。

「分かりません。僕一人くらい、放っておけばいいのに…」

「そんなのダメよ！」

「え…」

「昨日リーダーが言ってたわよね。私達以外のヘレティック集団——REWSは、キミを道具にしかないって。私達はそれを黙って見過ごせるほど、薄情じゃないの！」

どこか同属愛のようなものを感じはするが、誠は納得できなかった。

「そのREWSっていうの、本当にいるんですか？ イマイチ、ピンと来ないんですが」

「敵はいるわよ。私達だけじゃなくて、表世界にとっても脅威になりかねない連中が。奴らはね、兵器を開発すると必ずどこかの国に売りつけようとするの。単品の場合もあるし、表世界上の最新型兵器に混ぜたりしてね。もしくは自分達で使おうとする場合もある」

まず彼らは、最終的に売り込みたい国を選ぶ。

次にその国にとって信頼できる筋——つまり武器商人に売りつける。ブラックマーケットを通じた暗号文書で彼らに知らせ、顔も合わずに品と金とを交換する。互いの兵力を知っているので、彼らは余計な欲をかくことはない。

近年深刻なのは、ヘレティックが売りに出されるケースだ。

エリ達は、売られた彼らの残酷な結末を幾度も目にしてきた。

それ故に、誠を見殺しにはできなかった。

「それを阻止してるんですか、アナタ達は」

「開発中に襲撃するのが鉄則。実験段階や完成だと分かれば、全兵

力の半数以上が投入されることもある」

あとはヘレティックの保護とか、要人の警護とか、情報操作とか、色々……らしい。

言葉だけでは現実味が乏しくて、やはり誠は素直に信じられなかった。幽霊の存在を受け入れるくらいの話だった。

そんな非科学的な存在と同類にされているとは露知らず、「だからね、今回のキミの保護は特殊だったの。キミは、覚醒してなかったから」エリは言うってから改めて、バークという情報屋の奇妙さに寒気を覚えるのだった。

すると、「え……アレ……？」と誠は首をかしげて、何か引っかけたような顔をした。

「どったの？」

「おかしいですよ、それ」

「うん？」

「だって、それだったらどうしてエリさん達は、ボクを保護なんかしたんですか。覚醒因子は、覚醒しないと現れないんですよね？」

「！ え、あいや、それは……」

急に目を泳がせる彼女に、誠は追撃をかける。

「そうだ。それだと覚醒助長薬もおかしいじゃないですか。覚醒するかも分からない相手の為に、作る必要なんてないじゃないですか」「それは違うわ。助長薬は本来、不完全な覚醒状態——いわゆる半覚醒状態のヘレティックの、センスの上限を確認する為に開発されたの。キミのように発現前に使ったのは初めてだっただけ」

自然な覚醒には、人体に不具合を生じさせる場合がある。喩えれば、蛇やセミなどが、脱皮を上手くできなかったような具合だ。そ

れは後遺症にもなりかねないので、この組織では発見されたヘレティックには助長薬が必ず投与される運びとなっている。

一度使うと体内で抗体が作られるので、麻薬的な常習性は伴わない。無害と言われる所以の一つである。

「だとしても、ボクはその半覚醒状態でもなかったんですよ？」
「う…そうだけど…」

正鵠を射た指摘に、彼女は得意の笑顔で誤魔化すこともできなかった。

どうなんですかと壁際に追い立てられているところに、救いの手——もとい、悪魔的に荒々しい言葉が背中を打った。

「ガキ、調子に乗るのもその辺にしとけっ」

ズカズカと足早に近寄るケンの鋭い目に、誠は一息に気圧された。そのガラリと変わった空気を和ませるように、「ケンったら、気になってつけてたんだあ」とエリは茶化した。

「ちげえよ」

ケンは誠を見下ろして言った。

「ガキ。今の疑問は聞かなかったことにしておいてやる。だからテメーも、即刻忘れろ」

「ボ、ボクはガキじゃありません…。早河、誠です…！」

唇を震わせて、少年は主張した。

一瞬だけ感心したような顔をしたケンだったが、「だから、何だよ」と正面から受けて立った。

立てば雷、座れば火山、歩く姿は暴風雨。何者にも遮られず、誰であろうと売られた喧嘩は大人買いして、求められたようにただ拳を振るうだけ。

それが常軌を逸した負けず嫌いの困り者——雪町ケンなのである。

「ちょっとケン！ やめなさいよ、大人気ない！」

「女に庇われたままでもいいのか、ガキ？」

喚くエリを無視して、誠から目を離さなかった。

誠は唇を噛んで、子供の顔をしていた。

「いつまでも不貞腐れやがって。そんなに元の世界に帰りたいなら、方法を教えてやるよ」

「え…？」

虚を突かれ、張り詰めていた顔から緊張が失せた。

しかし、「テメーのその両足を、切り落とせばいい」

「な…っ！」 「ケン!？」

束の間だけ閃いた希望は、悪魔の魅せた絶望への入り口だった。

「そうすればテメーは、二度とセンスを使えない。誰からも狙われずに、表世界でヘラヘラと笑って生きていける。記憶だって、すぐに戻るかもしれねえぞ？」

いつもの仏頂面で、とんでもなく残酷なことを言い放つ男に、エリはついに怒りを露わにした。

「アンタ頭おかしいんじゃないの!？ そんなことして、彼の人生

「どうする気よ！」

「うるせえよ」

「この際だから言わせてもらおうわ！ アンタ、この子に対してだけおかしいわよ！ どうしてそんなに酷いことを、平気な顔して言えるのよ！？」

仲間に裏切られ、仲間が無差別に殺されたあの日、彼が差し出し
てくれた手は温かった。とても心地良い色をしていた。

それが今は、氷のように非情な色をしている。

「そうですよ……。そっちの都合で連れてきたくせに、勝手にも程がありますよ！」

「命があるだけマシだったってんだよ」

ケン
ケンは狼のように険しい形相を作った。

「ヘレティックに居場所はねえ。俺らは一般人にとって？ 恐怖？ そのものだ。尋常じゃねえから、同じ世界で生きることができねえ。奴らが抱いた劣等感で、一体今まで、どれだけの同属が殺されてきたと思う！？」

「彼を責めてどうするのよ！」

「だが、最後に俺達に銃口を向けるのは、その同属だ。俺達は奴らに売り買いされて、兵器として扱われる。挙句は自分のセンスを他人に売って、用心棒紛いのやり方で生きる奴もいる始末だ。テメーはもう、そういうくだらねえ世界の一部になってんだよ……！」

「じゃ、じゃあ、どうしろって言うんですか……！！？」

「……今から俺ともう一度、一対一で勝負しろ^{サシ}」

耳を疑ったが、彼の目は揺るがなかった。

「ルールは簡単だ。どちらかが降参するか、気絶するか、死ぬまで戦うだけだ。ハンデとして俺は素手しか使わない。テメーはどんな武器を使っても構わない。ただし、敗者が生きていた場合は、勝者の言うことを必ず一つ聞かなければならない」

ケンの意地だった。本当に誠のセンスが《韋駄天》と言われるそれかを、見極めたかった。

「俺はテメーをタダでこの世界から追い出すつもりはねえ。もしもこの勝負を拒否するなら、さっき言ったとおり、両足を切り落として元の場所に帰してやる。要するに、テメーがテメーの望む自由を手にするには、俺に勝たねえといけねーってわけだ」

「そんなの、一方的じゃないですか！」

「俺は、本気だ」

ケンは汚名を返上するかのごとく気迫で、改めて誠に挑んだ。

「こんな場所から自分の足で出て行きたいなら、俺と戦って——勝て」

＊ ＊ ＊

マリアナ海溝の複雑に隆起した岩盤に擬態する、通称ネイムレスの本部基地。

その内部施設の一つに、欧州の円形闘技場アンフィテートルムのような形の、巨大な訓練場がある。

そこはウヌバ達のように、他への影響があまりにも強過ぎるセンスを持つ者達が、その力を存分に発揮できるように造られた場所だ。だが今回のように、自由の所有権を巡る争いごと——決闘に用いられるのは久しかった。

その為、組織内でも有名な――あの雪町ケンが、最近表世界で保護した少年とガチンコでやり合うと聞きつけられ、ここぞとばかりにこの機会を見世物にしようと安易に考える者が出てくるのも仕方のないことだった。

レートは、先日の偽装テロの件が相打ちに終わったこともあり、ケンが五、誠が四、相打ちが一だ。

大穴狙いで、はたまたケンへの当てつけで誠に賭けた連中は、小さな背中に恐喝色の声援を飛ばすのだった。

「テメーっ、ガキンちょー！！ 負けやがったらタダじゃあ済まさないからなっ！！」

「オレの全財産、お前に賭けたんだ！ 絶対何とかしやがれよ！！」
「遠慮はいらねえっ、その生意気な銀髪野郎に全力で屁喰らわしてやれ、屁えっ！！」

ガハハハハと酷い笑いが巻き起こって、ケンは舌打ちした。

およそ十五メートルの高さから浴びせられるヤジのほとんどが英語だ。

誠は余計に恐縮して身を縮ませた。

連中はそこを囲む通路にある、開放厳禁の強化ガラスを勝手に開けると、身を乗り出して好き放題に騒いでいる。まるでフリーガンだ。

その様子にまた誠は、とんでもなくガラの悪い場所に連れて来られてしまったと嘆息を漏らすのだった。

『貴様ら静粛にしろ。作戦部戦闘大隊総隊長、及び第一実行部隊隊長、酒顛ドウジだ』

唐突にスピーカーから発された英語による自己紹介で、今まで五月蝸かった連中が一斉に口を噤んだ。

『これは貴様らが考えるような、下種な格闘賭博ではない。一人の少年が己の人生を懸けた、文字どおり真剣勝負である。貴様らがこの環境を窮屈に思い、この際に日頃のストレスを発散したいと思う気持ちには分かんなくてもいい。だが、今一度原点に帰れ。我々はこの身体に生まれたことを呪いつつも、世界の為に何かができると思じて、今日まで生きてきたはずだ。恥じることは何一つ無いほどに…』

特殊な合金で造られた高い壁の上が、まるで水を打ったように静まり返った。

誠は、円形の通路をつなぐ訓練場の監督室の窓を見上げた。そこには真剣な顔でマイクに向かう酒顛と、こちらに気付いてにこやかに手を振るエリの姿があった。

『しかし今、貴様らは、自らの顔に糞を塗りたくった。理想を守る為に空しく散って逝った者達に顔向けできんほどの、酷い面をしている…!!』

苦い顔をする組織の隊員達は、口々に五月蠅い黙れとつぶやいた。不愉快な言葉がケンの耳に届き、さらに深く眉根が寄った。しかしそれも、次の一言で全て消え去った。

『愚か者は訊いた、何故戦うのだと。英雄は答えた、ただ愛するが故にと…!!』

これを聴いた隊員達は思い出したように、まるで別人の顔つきになって背筋を正した。

誠は何事だと驚いた。一同の視線が彼に降り注いで、二度驚いた。

「ボクを、見ている…?」

隊員達は右腕を肩まで上げて、握り拳の人差し指と親指の付け根に、軽く唇を当てた。それは彼らが組織の一員であることを示す唯一の証となる、最敬礼である。

今のは誰の言葉だったかとエリが考えていると、「…セイギ・ユキマチの遺言いげんだな」監督室に同席するヘレティック研究の権威——メギイド博士が言った。

そうだった。ずいぶん前にリーダーが教えてくれたセリフだった。ケンの父——雪町セイギの遺したこの言葉が、今の組織の行動原理になっているのだった。

『二人共、自らのエゴに信義はあるな？』

今度は誠にも分かるよう日本語だった。

誠は急な問いかけにおどおどし、目の前にいるケンをちらりと見た。

彼は酒顛を見上げ、静かに敬礼した。

その様子に動揺しつつ、誠も同意するほかなかった。

誠の首肯を確認すると、酒顛はまるでスポーツの実況員や解説員のようにマイクを正面に置き、メギイドの隣に座った。

いよいよ緊張から、喉の渇きが激しくなってきた。誠は、再びケンに目を向けた。

ケンは彼から距離を取ると、誠の周囲に散乱した様々な武器を指差した。

「素人でも手軽に使える物を選んでやった。自滅しねえように、よく選んで使えよ」

小口径の拳銃からライフルやショットガン、マシンガン。どうやって使えばいいのか分からないような、ロケットランチャーのよう

な物まであるかと思えば、日本刀や西洋のサーベル、鞭やモーニングスターといった漫画でしか見たことがない物もある。

「つ、使えって言われても…」

「遠慮することはねえ。俺達が今着てる服は、次世代の防弾兵装だ。あと百年もすれば、表世界でも類似品が氾濫するはずの代物だ。並の銃弾なら、衝撃を全て無効化しちまう。まあ、ココに当たりさえしなけりゃあ、命の保障はできるってわけだ」

言いながら、ケンは親指で自分の額を指した。

誠はここに連れて来られる前に、更衣室でこの服に着替えさせられた。

首から両手足の指先まである黒い全身タイツを履かされて、その上に何の変哲もないような迷彩服を着せられた。両手にはロングググローブ、足にはロングブーツ、胸元は厚いボディアーマーを装着。これでヘルメットでも被れば、いかにもな軍用戦闘服である。

特にボディアーマーは曲者らしい。これは装着時に当人の指紋やら静脈やらを記憶させて、他人による強制解除を拒む設定が施されているようだ。

それもさることながら、こんな薄っぺらい全身タイツが何の役に立つのかというのが、甚だ疑問でならなかった。軍服を上に着ているとは言え、恥ずかしいことこの上ない。

少し股間がモゾモゾして気持ち悪いのである。

心なしかモジモジしているように見える誠を目の端に捉えつつ、「すみません、リーダー。私がついていながら…」とエリは改めて酒顛に頭を下げた。

「いや、ケンらしい実にシンプルな方法だ。ボスも止めなかったしな」

「うゝ、止めてほしかったんですけどぉ」

自分達を統率するボスという男が、一体全体本当に何を考えているのか、エリには量子ほども分からなかった。

「そもそも、分が悪過ぎますよ。素人相手と言っても、素手でどうにかできますか？」

誠はただの十七歳の少年。とは言え、引き金を引けないわけでも、剣を振れないわけでも、ましてや拳を握れないわけでもない。防護服も火力の如何によっては耐久性を失うこともあるし、ケンの言うとおり頭に当たればそれで終わりだ。

銃弾が彼の額を貫く。

それを考えただけで、エリはゾツとしてしまった。

そんな彼女を慮って、酒顛は言った。

「お前も知っているだろう。ケンはな、？天才的サラブレッド？なんだよ」

そうかもしれないが、それは血統だけの話だとエリがモノローグを過らせていると、「どうなっても知りませんよっ！」意を決した誠の声がゴングとなり、戦いが始まってしまった。

誠は、親切にも安全装置^{セーフティ}を外されているとも知らずに、自動式拳銃の引き金を引いた。もちろん軌道はメチャクチャだ。もはや数撃ちゃの世界だったが、誠のデタラメな銃口が偶然にもケンを捉えた瞬間、彼は素早く右へ跳ねた。

「えっ!？」

骨格や筋肉の補助をしてくれる全身タイツのお蔭で、誠はいくら銃を撃っても肩を外さなかった。しかし訓練一つしていない彼では、

いくらやっても相手に傷一つ負わせられない。

その上ケンハ、肝心な時――誠がいけると思っけて引き金を引く瞬間に限って、回避行動を取るのだった。

この光景ハ、エリも今まで何度も目にしてきたものだ。

酒顛ハ彼女に言っただ。

「アイツの取り柄ハ、耳や鼻だけではない。放たれた弾丸を見切る動体視力。獣のようにしなやかな肉体。素早い脚力。相手の身体を穿つ筋力……。全てがノーマルの非ではない」

ヘレティックと一口に言っけても、センス以外の能力ハ常人と然して変わらない場合ハほとんどだ。覚醒と同時に基礎体力ハ上昇するという報告もあるが、それは劇的な変化とは言えない。覚醒因子の発現に伴って、身体能力の平均値ハ小さく向上しただけである。

実際、エリも《サーマル・センサー》というセンスを持っけているが、運動能力などは日々のトレーニングで鍛えなければ、そこらのOLと変わらない。

しかし雪町ケンハ、ずば抜けているのが聴覚と嗅覚というだけで、基礎的な身体能力も含めて人間離れしているのだった。

「奴こそが、本物のヘレティック――新たなる人類の先駆者だ」

「人の遺伝子は、強い肉体を求めた。人類ハ今後、人口増加による新たな苦境に立たされる。人が人そのものを疎む時代が来るのだ。

もしも遺伝子にすら先見の明があるならば、彼のような者が現れても不思議ではない。強い者がだけが生き残る、それがこの世の理だ」

しかし、彼は不死身ではない。死ハ、一瞬で訪れる。もしも誠がケンを殺してしまったら、自分は誠を許せるのだろうか…。

エリハ胸の前で、祈るように両手を組み合わせた。

彼女の肩に、ウヌバが手を置いてうなずいた。心配するな、信じ

ろ。彼の目はそう告げているようだった。

エリは再びケン達に目を向けた。

そんな彼が、いよいよ打って出た。

弾切れに慌てた誠が、すぐ足元に転がっていた別の銃を拾って構える。だがケンに手ごと掴まれ、捻られた。易々と銃を奪われ、捨てられる。

結局、先日のように軽く突き飛ばされてしまった。

「うぐっ！」

「オラ、もう降参か？」

誠は荒野をイメージして作られた地面を這い回り、すぐに別の銃を手にとって乱射した。

しかし、全て回避されてしまう。

「な、何で…！？」

当たらない。

銃を手持てば至近と言える距離なのに、どうして一発も当たらないんだ。

ケンも呆れていた。銃弾を人に当てるのは至難の業であっても、いくら回避していると言っても、一発くらいは掠り傷をもらうだろうと想定していたのに。

とんだ見込み違いだ。

「センスねえなあ、テメー。ホントにヘレティックだよ」

「だから、そんなの知りませんってば…！」

「思い出せよ、あの時のテメーをっ…」

ケンの望みは、銃撃戦による結末ではない。銃口から撃ち出され

た弾速を遙かに凌ぐはずのセンスを発揮した、誠の脚力を相手にしたいのだ。

彼の意図するところを理解している酒顛達は、事の成り行きを見守るしかなかった。

メギド博士達——研究チームは、常に誠の身体データをチェックして、センスの発動の瞬間を見逃さないように目を凝らしていた。二人の緊迫感がこちらにも伝わってきて、エリはゴクリと生唾を飲んだ。

その、直後だった。

「面白いことをやっているじゃないかい」

「「「!」?」」」

縁の広い黒のソフト帽を目深に被り、同じく黒いトレンチコートに身を包んだ、いかにも怪しい男が、酒顛の背後に立っていた。

いつの間に……。エリやウヌバが目を剥いていると、「絶、^{ぜつ}何しにきた」酒顛は身動きもせずに黒づくめの男——累差^{るいさ}絶に問うた。

絶は長く癖のある黒髪の間髪から見え隠れする、赤く薄い唇を引き上げた。

「お前達が変わり種を持ち帰ってきたと小耳に挟んでねえ。アレが、そうかい?」

絶は、雪町ケンと向き合う少年を眼下に見た。

「……そうだ」

「使えそうかい?」

「お前の考えるようにはならんさ。彼は、普通の子供なんだよ」

「そうかい、それは残念だ。だが、雪町Jr. が自ら出張るとは、どういう風の吹き回しだろうねえい」

「……………」

酒顛にとって絶は、誠のセンスを最も見せたくない相手だった。近頃の彼の考えることは、付き合いの長い酒顛にも計り知れないものがある。

しかしここで彼を邪険にするわけにはいかない。組織内での火種は、少ないに限る。

酒顛がポーカーフフェイスで警戒しているのを知ってか知らずか、絶はうそ寒い笑みをたたえていた。

そこへまた一人、男が入ってきた。ガタイの良い、短髪で四角い顔の男だ。

「螺葵^{ラキ}、お前もよく見ておけ。何かが起きるらしい」

「はっ」

「そうなんだろう、？大江山の暴れ鬼？よ」

「……………」

酒顛は答えない。

李螺葵^リという中国系の男は、絶の隣に並んで二人を観戦した。

その背中にエリとウヌバが睨みを飛ばすが、彼らは眼中に置かなかった。彼らが漂わせる雰囲気は異様で、奇妙で、吐き気がするものだった。微かに血の臭いがあるのは気のせいだろうか。

エリ達が勘繰っていると、「そうだ、打ち込んできやがれ！」とケンの声が轟いた。

誠は銃を諦め、先日のように鉄パイプを手に使っていた。

「どんなに才能のねえ奴でも、棒振って当てられねえ馬鹿はいねえんだからよお！」

「うあああああっ！」

誠は乱暴に鉄パイプを振り抜き、ケンはそれを軽く躲しては突き飛ばした。

「煽ってるの…?」

エリの問いに酒顛が黙っていると、また一人、監督室に男が滑り込んできた。

「何をしているんだ、キミ達は!」

組織の医師——清芽ミノルだった。

酒顛はきつと反対されるだろうと考え、彼には今回の件を伝えていなかった。

「絶まで…どうしている?」

「奇遇、かな?」

相変わらず意味深な物言いをする彼はさて置き、清芽は酒顛に迫った。

「聞いてないよ、酒顛くん。ここまでさせて、どうなるものでもないだろ!」

「…彼の為です」

「何…!?!」

「彼はこれから、様々なことを自分で選択して生きていかなければなりません。記憶を失い、無気力になっている彼を奮い立たせるには、荒療治が必要であると思うのです」

「だからと言って、主治医である僕を差し置いて勝手に決めていいことじゃない! メギイド博士も、何をやっていらっしゃるのか!」

さも当然のように計器に向かう白頭翁は、椅子をギィッと鳴らして顔だけを向けた。

「キヨメ、少し落ち着きたまえ。ヘレティックがこの世界で生きていくことの厳しさを、あのケン・ユキマチ自らが教えているのだ。水を差すような真似を、誰ができようか」

「しかし、セイギさんが生きていたら、こんなやり方は絶対に認められませんよ!!」

清芽は尚も怒鳴り散らした。近年稀に見る激高ぶりである。

「清芽先生、それは違います。生きていますよ、セイギさんは…」
顔をしかめる彼に、酒顛は言った。

「生きているんです、セイギさんは、彼の中に…」

そのセリフに、絶が反応した。彼をここへ呼びつけたメールには、雪町セイギという名は一切出ていなかった。

「……酒顛、それはどういう意——」
「ん、来るかっ!？」

酒顛は腰を浮かせて言い放った。言葉尻を打ち消された絶は刮目した。

砂埃が舞う訓練場の中央で、すり剥いた膝を地面につける誠の姿がある。彼は荒い鼻息の後、ケンを凄まじい剣幕で睨みつけた。

この空気だ。この空気に、俺は気圧された。

ケンは後頭部の傷が疼くのを感じて歯軋りを立てた。対して、頬から首筋へ、冷や汗が滴り落ちる。

「そうだ、見せてみろや! 《韋駄天》!!!」

「う…あ、ああ、あああ——」

唸り声の直後——刹那——ケンの視界から誠は姿を消した——それは0コンマ以下の世界だった——もしもケンに優れた聴覚がなければ——誠が絶叫していなければ——この一撃で勝負は決まっていたのかもしれない——右からの一撃を予期したケンは懸命に腰を捻って防御の型をとった——当てずっぽうのそれが功を奏したのか大事には至らなかった——正確には誠自身のスピードとパイプの振りどが噛み合わなかったお蔭だ——ケンは誠の不様な体当たりを全身で食い止め——吹き飛んだ

——ああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

爆音の中、監督室も、通路から眺めていた組織の構成員も、全員が度肝を抜かれて唖然となっていた。

見たことがある。聞いたことがある。間違いない。

最速にして最強のヘレティックと恐れられた男のセンス——《韋駄天》だ。

「リ、リーダー…、アレがああ…? 昨日よりも、ダンチに速いわよ!」

エリが確かめると、酒顔は深くうなずいた。

「そうだ。ケンの父親——雪町セイギさんの《韋駄天》だ…!!!」
「あの一瞬で後ろを取ったのか!?!」

メギイドも愕然としていた。素人目で見れば、《韋駄天》の前覚醒者——雪町セイギのように、見事なセンスの発動だった。

動揺を隠し切れない一同の中で、絶だけは残忍な笑みを満面に浮かべていた。

最高のプレゼントじゃないか。

口中でそうつぶやきかけると、清芽が身を乗り出して叫んだ。

「セイギさんはこんなものじゃないっ、まだ来ますよ！」

誠の体当たりに、二人は二手へ弾き飛ばされていた。

ケン は危険を感じ、素早く受け身をとって立ち上がり、直ちに身構えた。

腕が痛くてだるい。まるで重機で殴られたようだ。折れてはいないが、ヒビくらいは入れられてしまったかもしれない。

一帯に立ち込める塵芥のカーテンで、視界がほとんど失われている。さらにはそのせいで嗅覚も役に立ちそうにない。やはりここは、聴覚頼りだ。

「テメー…、やりやあでできるじゃねえかよ」

誠はいよいよもって自らのセンスを自覚した。

足の筋肉が突然大きく膨らみ、ぐつぐつと沸騰したかと思うと、途轍もない激しさで弾けたのである。すると足がほとんど勝手に、ぜんまい仕掛けのロボットのようには回転し、一瞬で相手との間合いを詰めた。

身体は固くなったような感覚を覚え、動体視力も通常より数百から数千倍と思える速さで機能した。自分以外の時間が止まったような世界を目にした。内臓では肺や心臓が奇妙な動きをした気がする。少し吐き気がするのはそのせいかもしれない。

「コレが…センス…コレが…」

勝てるかもしれないと、誠は素直に思った。

「仕返してやる」

途端、地べたを激しく蹴りつける音が鳴った。

「調子……」

——こいてんじゃねえええええええええええええええええええええつ！！」

まるでヘレティック同士の本気の実戦——殺し合いじゃないか。

清芽が酒顛を責めようと顔を向けると、『ケンっ、やり過ぎよ！ 殺すつもりなの！？』エリが先にマイクに向かって叫んでいた。

ケンが最も嫌いな音——女のヒステリックな金切り声がスピーカーから響く。彼は左頬から滴る血を拭うと、血みどろの右手でおもむろに遠くを指差した。

「コレっ、勝手にいじるな！」

エリはメギイドが叱るのを無視して、コントロールパネル上のボタンを押し、砂煙を排気口から強制的に除去させた。訓練場の端にだけ煙が充満して、ケンの示す方向が露わになっていく。

誠が立っていた。

血塗れの身体を、曲がった鉄パイプで支えながら、辛うじて立っていた。

しかし出血量に対して、傷がそれほど深くないように見える。

「《韋駄天》の最大の特徴の一つは、瞬間移動を思わせる亜光速の脚力。そしてもう一つは、センス発動中の肉体の強度が、鋼のように硬くなることだ」

「それに加えて、劇的なスピードの再生能力もある。あれからもう一度、セイギさんのデータを読み返したよ。あの人にもその能力があったが、それは《韋駄天》発動時だけだった。活性化した覚醒因子によって機能するんだ。つまり疾走状態でなければ、急速な回復は無い」

「えっ、えっ？　ってことは何？　本当にマズかったのは…!？」

酒顛と清芽の解説を聞いて、エリは辟易した。

あんな子供を相手に、ケンが本気になっている。

彼が傷をもらうのを見るのも久しぶりだったのに、これじゃあ——
「そうだ。ああでもしなければ、ケンがやられていた」と酒顛も苦笑いだった。

絶は細く切れ長な双眸を目一杯開いて、癖のある長髪の隙間から

のぞかせていた。

「面白くないが……次で、決まるねえ」

彼の一言で緊張が極限まで高まった。

それに答えるように、ケンはその場で地表スレスレまで股を割り、身を低くして上体を右に捻った。

「ちよつと待ってよつ、
 颯風（ひょうふう）までやる気なの！？」

いくら何でもそれは誠が危険過ぎる。

エリが再びマイクに口を近付けるが、酒顛は彼女のアゴから頬を掴み上げて食い止めた。

「ひーはーっ!？」

「オオオアアアアアアアアアアア
ーーーーーーーーーーーーーーーー」

誠が叫んだ。絶叫よりも野生的な、猛獣の咆哮のようだった。

「うつせえっ!!」

ケンが咄嗟に、上半身をギュルリと左へ回した瞬間、「酒顛。中々良い見世物だったよ。大切に育てることだね」鈍い音の後、花火のように天井近くまで打ち上げられた誠を背に、絶と螺旋は監督室を後にした。

カポエイラのような円運動からの素早い逆さ蹴り上げ。

ケンの放ったそれは、超高速度の誠を確実に捉えていた。本来の連続的な動きを一撃に込め、〈颯風〉という技は終わった。

落下した誠は不発弾のように粉塵を生むだけだった。衝撃は硬質

化した肉体が耐え忍んで、彼の身体を無残な有様に変えることはなかった。

「い、生きてるわよね!？」

すぐに訓練場へ救護班が駆けつけ、誠の脈拍を確認した。
両腕で大きな丸を作る彼らに、エリは深く胸を撫で下ろした。

「まあコレで一件落着ですけど、さっきの人達って…」

あっさりとして切り替えの早いところが、彼女の美点である。
いつもの調子に清芽は苦笑しながら、先程の黒ずくめの男について話した。

「彼の名は累左絶。？更地のルイーサ？の異名を持つ、組織の掃除屋だよ」

「ああー。私達実行部隊の事後処理してくれてる作戦^{リセッター}処理部隊ですか。どーりで気色悪い感じがすると思ったあゝ」

「まあね。名目上は事後処理と言っても、実際は実行部隊の不始末を一手に請け負う汚れ役だ。荒んだ仕事だよ」

「敵基地施設や死体などの、裏世界に関する痕跡という痕跡を抹消。他は敵残存兵力の回収、尋問…。絶の奴は、アレを好きでやっていると言うから驚きだ」

酒顛は肩をすくめた。

組織は、ここマリアナ基地を中枢として、世界各地に支部を置いている。各支部の活動の流れも、本部のそれとほぼ同じだ。諜報部隊が情報を得て、それを精査した司令部が作戦部の実行部隊を使って何らかの作戦を遂行させる。

しかし実行部隊だけでは、一般人の目にその姿を晒しかねない。

だから、事前に現地で活動している諜報部隊と作戦処理部隊が彼らのバックアップをし、隠密行動におけるリスクを軽減するのである。また、実行部隊の活動中は、周囲への警戒に余念がない彼らでも、その性質は全く異なっている。実行部隊の作戦遂行が確認されると、処理部隊は警戒態勢を解除し、作戦現場のあらゆる痕跡を消し去っていく。諜報部隊は処理部隊が引き上げるまで情報を操作し、表世界の住民に紛れ込んで姿を隠していく。全てを作戦前の見慣れた風景へと変えるか、事故や自然現象に見せかけて更地に変えるかして、作戦は完遂となる。

だが、全ての実行部隊を統率する立場にある酒顛でさえも、尋問後の捕虜の行方は不明だ。

組織の暗部が、どこか知らない場所に監獄を用意し、そこに彼らを永久に収容しているという噂さえ耳にするが、真実は定かではない。

そういう活動に絶は絡んでいるのだろうか。

酒顛は物悲しくなった。

「セイギさんが生きていた頃は、俺と絶と、先生も一緒にチームを組んでいたんだがな…」

「えっ、先生も前線に出てたんですか!？」

「…ハハハ。実はね、そういう時もあったんだよ。怖くなって離れたんだけどね」

「あぁっ、だから私の剣術指導もして頂いていたんですね!」

「隠していて悪かったね。あぁだけど、僕の家系が特有の流派を守っているのは本当だよ。キミに教えた技術は嘘じゃない」

「そんなことは分かってますよ、だから私はこうして、トップチームにいるんですから。先生の教えの賜物です。それでも、へえー、知らないことってあるもんですねー!」

エリは甚く驚いた。

彼女の知っている清芽ミノルとは、いつもニコニコ、徹頭徹尾優しさでできている本部医療班のリーダーだ。怒ったところはもちろん、今日まで声を荒げる場面にも立ち会わなかった。医術の腕前は確かで、センスの《体内透視》を使つての切開や縫合は、誰にも真似できない、精確かつスピーディーなものである。

エリは剣術の達人として、組織では有名だ。その彼女に剣を教えたのは清芽だが、元実行部隊所属だったとは一言も聞かされていなかった。

しかも、雪町セイギと酒顛ドウジが揃っていたチームと言えば、米ソ冷戦終結間際の、裏世界にとっても慌しい時代に、組織の一番槍として活躍した歴代でもトップ・オブ・トップのチームだ。酒顛からはセイギの偉功ばかりを聞かされていたので、清芽や絶の話を耳にしたことが無かった。

「セイギさんは、俺達をつなぐ大切な糸だった。その糸が切れてしまい、今では物の見事にバラバラだ。特に絶と話したのは、何年ぶりだろうか」

ある任務の中、雪町セイギは殉死した。

それにより、第一実行部隊――通称・日本人部隊は事実上の解散を余儀なくされた。

酒顛はセイギの信念を受け継ぐべく前線に残り、絶は処理部隊に志願、清芽はショックの余り落胆していたが、本部の専属医療班のリーダーとして復帰し、多くの仲間を救ってきた。

そうして刻が移ろい、再び《韋駄天》を持つ少年が現れた。

それに引き寄せられるように、また彼らは一堂に会することになった。

エリは何か嫌な予感がして、自分の腕を扼した。

ふと訓練場を見下ろすと、ケンが何やら叫んでいた。電子スクリーンをクロースアップして音声を受信すると、『おい、データは取

れたんだろうな!』とケンの割れた声が響いた。
メギイドは慌てて応答した。

「あ、ああ、ありがとうユキマチ、礼を言う。間違いなくマコト・サガワのセンスは、《韋駄天》であると判断された。彼が精進すれば、お前の父さえも超えていくだろう!」

『…けんな』

「ん…?」

ケンは鋭い糸切り歯を剥き出しにして憤慨していた。

『ふざけんなよ、テメー。何浮かれてやがんだ。心が痛まねえのか
…!?!?』

「な…」

狼狽するメギイドに代わり、酒顛がマイクを握った。

「ケン、撤回しろ! 博士は研究者としての意見を述べたまでだ。
この方がいなければ、今日の俺達は無かった。お前のセンスを陰で
支えてきたのは博士なんだぞ!」

『学者だろうが何だろうが、知ったこっちゃねえんだよ。メギイド
には前々から言っておきたかったことがあるんだ。それを今ここで
言っというやる』

ケンの姿がセイギの面影と重なって、メギイドはゾッと身の毛を
よだたせた。

ケンはさらに追い込むつもりで宣言した。

『今度俺達ヘレティックをモルモットみてーにしやがったら、殺す
…!?!?』

「ケンっ!!」

「い、いやっ。いや、良いんだ…っ」

年離れた科学者は酒顛の肩に手を置いた。「しかしっ!」と彼は反論しかけるが、マイクに向かって青年に伝えた。

「ユキマチ。今の言葉、しかと胸に刻んでおく。すまなかった…」

彼は深く頭を下げて謝意を示した。

ケン是不満顔のまま訓練場を後にした。

「博士、アナタが謝ることではありませんっ」

「いや、彼は正しい。今回は私の口が過ぎたのだ。私自身がヘレテイックであるというのに、研究に没頭するあまり大切なことを忘れていた。キミ達に申し訳が立たん…」

「頭をお上げください。最近のケンの口悪さは目に余ります。ハッキリと言って——」

おもむろに顔を上げたメギイドは、「酒顛。今の場面では、セイギ・ユキマチでも同じことを言っていたはずだ」

酒顛はグツと詰まった顔になり、語次を呑み込んだ。

「その時キミは、今と同じ言葉で諫めることができるか。人権を軽んじた私が言うべきことではないが、個人や立場の違いで、正しい物言いへの受け取り方を変えるべきではない」

項垂れる大男に、清芽も擁護するつもりで言った。

「酒顛くん、キミも間違っではないよ。ただ、彼の怒りはいつだって正当なだけなんだよ。そして彼はいつだって、言葉だけでなく、

行動で示してきた」

「そこへ、「持ち上げ過ぎな感じもしますけどねー」と女が口を挟んできた。

「エ、エリくん…」

「だって、私やウヌバみたいに、ケンのお父さんのことを知らなかったら、やっぱり今の言い方は間違ってるように聞こえますもん。ね、ウヌバ？」

急に話を振られたウヌバは、「…分からん」と首を横に振った。酒顛とメギイド、どちらの意見が正しいのかが分からないのか、そもそも日本語が分からないのか、どちらだろうか。

「ウヌバ。どんなに分からなくても、女子の言うことにはとりあえず相槌を打っとけばいいんだからね」

「こうか？」

ウヌバは？相槌を打つ？というイデオムの意味を思い出し、ぎこちない首肯を試みせた。

「そう、それぞれ。じゃないと彼女できてもすぐにフラれるよ」

今度は？彼女？という言葉がピンと来ない。ガールフレンドという英語に直してみても、あまり具体的には理解できなかった。

「でもね、適当にやってばっかいると、話聞いてないじゃんってなるから気を付けてね」

「…？」

「相槌はね、適当にやるの。小さじ少々くらいの感じ」

「コさ…?」

？小さじ？は知っている。しかし、？少々？とは何だ。どのくらいだ。

「もしくは小指の爪の甘皮くらい」

「コユ…アマ…?」

ウヌバ、パンク状態である。自分の小指を眺め、何故かいきなり舐めはじめた。

「甘くない、甘くナ、アマカ…コツメ…?!」

「分からない？　じゃあねえー、ダウンジャケットからフェザーがびよこんと飛び出してるくらいのの——」

「やめてやれ。遊びすぎだ」

ウヌバは聖書——大型国語辞典を抱え、煙を上げてオーバーヒートしてしまっていた。

* * *

訓練場区画から出た絶と螺葵は、エレベーターに乗って移動していた。

「絶さん。今の少年のセンスは…」

「ヘUriオン」と共に散った男が、最強の名を欲しいままにした史上最高のセンス——《韋駄天》さ

「そのスピードたるや、音速を越え、亜光速に匹敵するとまで言われる、あの…?」

「そうさ。あの情報屋風情に感謝する必要があるそうだねえい」

絶はエレベーターの壁に背中を預けると、片手で自分の顔を覆って言った。

「アレは私から見ても異常なセンスだよ。敵の研究所に侵入したわずか十秒後には、その中枢部で爆発が起きるんだ。私達の仕事なんて何も無かった。任務開始と同時に終了なんてのはザラだった…」

「…とんでもない人がいたものですね」
「アレを経験して以来、私の感覚は麻痺しっ放しさ」

感傷に浸っていた彼だったが、唐突に顔を擡げると、螺葵を睨んだ。

「ところで、そのバグについて分かったことはあるのかい？」

「はっ。目下のところおっ——!?」

絶は自身の黒いソフト帽で螺葵の顔を押さえつけると、拳銃を彼の口に捻じ込んだ。

冷たい銃口が舌に当たり、螺葵は呼吸さえままならなかった。

「か…かはっ……!!」

「さっさと野郎の首持ってきやがれよ。野郎の存在は、いずれ私達の弊害になる…!」

「…そ、早急に、やらせます…っ」

「テメーもやるんだよ。ミンチにされなくなかったらねえいつ」

ゴウン…、ゴウン……。

エレベーターで無機質な音が、しばらく静寂をかき回した。

〔二〕（後書き）

T・Fです。

昔、『8マン（エイトマン）』というアニメがあったんですが、その主人公は仮面ライダーのように改造されて、超高速で走ったりする能力を持っていました。

それが早河誠の《韋駄天》の着想を得るきっかけになったかは分かりませんが、多少は影響を受けているかと思います。

あとは、私が生涯最も好きだと言える漫画『烈火の炎』の敵キャラが見につけていた魔導具「韋駄天」の影響もあるでしょうね。

また、「高速の足」というのは、小さい頃からの憧れでもあります。私は運動部にずっと所属していたにも拘らず、中学生まで鈍足で、高校生になってやっと人より速く走れるという実感を得ました。

それでもやっぱり、足が速い人には憧れました。

速ければ、あんなことやこんなことが……それが超能力であれば、もっと…

そんな妄想の結果が、コレですw

色んな戦闘シーンが浮かんでは消えていきます。忘れないようにメモを取って、何度も頭に思い描いています。

最後まで書き切れたらいいなあ。

まだまだ始まったばかりです。

今後をお楽しみに。

それでは今日もこの辺で失礼しますね。

では、T・Fでした！

良いお年をーっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3165z/>

ネイムレス

2011年12月24日08時53分発行